

シンフォギアの世界にネコアルクを投入したら面白おかしくなるん  
じゃね？

クロトダン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

アチシはネコアルク。

だがアチシはネコアルクであつてネコアルクではにやい。

こゝみえてアチシは前世の記憶がある。

いわゆる転生者てやつにや。

まー定番の神様転生という神様のミスで死んでしまったのよ。

んで、アチシは神様にネコアルクになりたいって頼んだ後、くじを引いて選んだこの世界に転生した。

最初にこの世界に転生した時は、特典間違えたか？と思つたが、なんとかこの世界で自由に過ごしてるにや。

今はS・O・N・G・という組織で戦闘兼食堂調理師兼S・O・N・G・内の掃除係として働いている。

ム？なににやら向こうでにやにかあつた様子。

仕方にやい、アチシが一肌脱いでにやろうではないか。

それでは読者諸君、またにや。

気分転換にシンフォギアの曲聴きながら型月のとある本に出てくるネコアルクを見て

「ネコアルクがシンフォギアの世界にいたら面白おかしくなるんじゃないね？」

とアホな事を考えた結果気づいたら書いていた。

まだゲームが終わってないのに本当なにやってんだ俺？

ちなみに作者はネコアルクはマンガ版とメルブラ、タイコロアツ  
パーのゲームしか知りません。

口調はある型月の単行本を参考に書いてます

優しい方がいらっしやれば教えてくれると助かります。

## 目次

### 番外編

こどもの日特別編：ネコアルクの魔法の瓶 1

### 本編

シンフォギアの世界にネコアルクを投入したら面白おかしくなる  
んじゃね？ 7

アチシはネコアルク 12

プリチーガールと会った話にや 19

シリアスシーンの空気を読まにやいそれがアチシにや その1

29

シリアスシーンの空気を読まにやいそれがアチシにや その2

36

格好いい台詞を言っても、後から落ち着いて考えると黒歴史にや

45

ケモミミ妹は姉特効が入るにや 52

デスっ娘とジーフ娘の二人は仲がいいにや 62

私が、ネコで、あるものかあああああつ!! 69

大切な人を護る為なら……（注：流血、残酷な表現あり） 78

辛そうで辛くない、むしろ辛さを認識したくない赤い食べ物、なく

んだ？ 92

アチシ色に染めてやるにや 100

翳り裂く閃光編その1：別世界の響とネコ○○○ 110

XD 翳り裂く閃光編その2：月の使者と混沌の使者！ 117

XD 翳り裂く閃光編その3：私の温かい場所 126

## 番外編

### こどもの日特別編：ネコアルクの魔法の瓶

——ネコアルク視点——

5月5日、こどもの日、それはこどもの人格を重んじ、こどもの幸福をはかるとともに母親に感謝する特別な日であるにや。

そして、こどもの日と言ったら鯉登り。

鯉登りと言ったら滝登り、滝登りと言ったら龍になる。

「てなわけで、5月5日になる前にチョックラ中国にある竜門の滝に行つて、龍になつて来るにや」

「どうしてそうなるの!?!」

リュックザックを背負つて、響ちゃんと未来ちゃんにそう伝えした後、驚いている二人を置いてアチシはキャッツフライジェットで中国にある竜門の滝に向けて飛んで行つたにや。

——ネコアルク視点、終了——

——こどもの日、当日——

——響視点——

「という訳なんです」

「どういう状況だ(よ)!?」

ネコアルクが飛んで行つた次の日、S・O・N・Gの司令室で昨日のネコアルクの行動をみんなに話したら、予想通りにクリスちゃんとマリアさんのツッコミがきた。

まあ、普通はそう思うよね……。

「しかし、ネコアルクも思い切つた行動をするものだ。生身で滝に登つて龍になるとは……どんな姿になるのか少し気になるが……」

「先輩もマジになって考えるなよ！どう考えてもむりだろ種族的に！普通は鯉だろ!!」

「いや、貴女も落ち着きなさい」

翼さんのずれた発言にクリスちゃんが混乱しながらツツコミを入れて、その後にはマリアさんがクリスちゃんにツツコミを入れた。

「そもそも、竜門の滝ってなんデスか？」

「竜門の滝とは、『黄河上流にある竜門の滝と呼ばれる急流を登りきれた鯉は、化して竜になるといふ』中国の伝説に出る滝の事です。

ですが、実際に鯉が龍になったという目撃例が過去に何度かあったようで、可能性はあると思います」

切歌ちゃんが首を傾げて質問をするとエルフナインちゃんがそれに答えながらパネルを弄って、モニターに昔の文字が書かれた資料を写す。

モニターには滝を登っている鯉が龍になる工程が描かれていた。

「…でも、ネコアルクが本当に龍になれるのかな？」

「あはは…でも、龍になったネコアルクさんの姿も少し見てみたい気が……」

「やめて頂戴、もしなかったとしたら余計手がつけられないわ」

調ちゃんセレネちゃんの言葉にマリアさんが頭を抱えて否定する。

まあ、確かにもしネコアルクが龍になったら今よりもっと大変になるね。

「でも、こどもの日かあ……ねえ、覚えてる響？そういえばあの頃もこんな感じだったよね？」

「あ、そういえばそうだね。懐かしいなあ」

「あの頃？何かあったのか？」

奏さんが首を傾げて質問すると私はみんなに子どもの頃、ネコアルクがしでかした出来事を話しました。

——10年前、こどもの日——

——立花家——

「こいのぼりに乗ってみたいなー」

まだ私と未来が小学生だった頃、私が言った言葉が切っ掛けだった。

「なに言ってるの響？鯉のぼりに乗ることなんて出来ないよ？」

「わかってるよ未来。でもさ、あんな風に空を自由に飛んでみたいなんて思わない？」

「まあ、確かにそう思うけど……」

未来は一度無理だと否定したけど、私がそう言うのと苦笑してたけどわかってくれた。

「にやにや？響ちゃん、鯉のぼりに乗って空を飛びたいのかにや？」

私達が話していると柏餅を食べていたネコアルクが近寄ってきた。

「フーム……あ、ちよつと待っててね」

私がそうだよ、と言うとネコアルクは少し考えた後、何か思い付いたのか少し待ってと言って部屋を出て、それを見た私達はなんだろうと首を傾げた。

しばらく待っていたら、子どもの私達が乗れそうなくらいでつかい鯉のぼりを両手に持ったネコアルクが部屋に入ってきた。

「ネコアルク、こいのぼりを持って何をやるの？」

「ニヤッフッフッフツ、それはね……」

私がネコアルクに何をするのか質問すると、ネコアルクは持っていた鯉のぼりを床に置くと、空中に現れた黒い穴に手を入れて瓶に入った赤い液体を取り出して、それを私達に見せた。

「何その液体？」

「これ？これはねー、響ちゃんの願いを叶える魔法の液体にや」

「魔法の液体？」

ネコアルクが言った言葉に私と未来は揃って首を傾げると「まあ、見ればわかるにや」と言って、ネコアルクは私達を連れて庭に出た。

「ワアアアーーーーッ！スゴいスゴーーーーっ!!」

「本当に空を飛んでる……!」

空高く飛ぶ鯉のぼりの上に乗った私はその光景を観て、喜んで声を挙げ、未来は呆然と呟いた。

庭に出たネコアルクは庭に拵げたでっかい鯉のぼりに赤い液体を振りかけると、鯉のぼりが一度光った後、身体を膨らませて空中に浮かんで、本物の鯉みたいに口をパクパク動かし、それを見た私達は凄く驚いた。

「ニヤッハッハッハッ!どうかにや二人共?鯉のぼりに乗った感想は?」

「スゴいと言えないよ!ありがとうネコアルク!」

「本当に鯉のぼりに乗れて驚いているけど、私も嬉しいよネコアルク」  
私達は笑顔で後ろに立っているネコアルクに礼を言うとネコアルクも笑顔を浮かべた。

「でも、どうして鯉のぼりが空を飛べるの?さっきの液体のおかげなの?」

「そうにやよー、その秘密はこれにや!」

未来はネコアルクに質問を投げるとネコアルクは笑顔でそれに答え、右手に持ったもう一つの赤い液体が入った瓶を取り出して見せた。

「これはねー、ある石が含まれた液体でね?これを鯉のぼりにかけて、擬似的な生物にしたんだにや」

「擬似的?生物??」

「あー、要するに簡単に言うとな、これのおかげで鯉のぼりを一時的に本物の鯉にしたんだにや」

「なるほどー!」

私が理解出来ず、首を傾げているとネコアルクは分かりやすく説明をしてくれるとようやく理解できた私はなるほどと手を叩いた。



「でも、こんな大きい鯉のぼりなんてどこから持ってきたの？」

「それは企業秘密。まあ、こどもの日が終わったら返片付しに行くから気にしない気にしない！」

「今言った言葉に違和感を感じただけど!？」

未来がネコアルクの言った言葉にツツコミを入れているのを尻目に私はこの空の光景を目に焼き付けるように見続けた。

・  
・  
・

「という訳なんだ」

「へー、あいつも中々良いことするじゃないか」

「鯉のぼりに乗るなんて羨ましいデス！」

「…そうだね切ちゃん。私達も大きな鯉のぼりに乗ってみたいね？」

「調もそう思うデスよね！私達も乗ってみたいデース！」

私の話を聞いた奏さんがここにはいないネコアルクを褒めて、切歌ちゃんと調ちゃんが羨ましいと口にする。

いやー、本当に懐かしいなあ。あの後、遅くまで空を飛んでいたから、私のお母さんとお父さんと未来のお母さんとお父さんに怒られたんだよねー。

因みに、ネコアルクは遅くまで連れ回した罰としてその日のご飯は抜きになった。

「ん?…ああ!10年前のあれはネコ君の仕業だったのか!」

「何か心当たりがあるのですか叔父様?」

心当たりがあったのか師匠が突然大声を挙げた。

「10年前、とある町に昔に作られた巨大鯉のぼりが何者かに盗まれたという事件があつてな。当時は厳重な警備体制の中、数分で鯉のぼりが盗まれたんだ。」

まさかネコ君とは思ひもしなかったが……

ええっ!?あの時の鯉のぼりって盗んだ物だったの!?なにしてるの

ネコアルク!!

——ビーツ！ビーツ！——

「司令！中国大陸から高速で移動する飛行物体がこちらに向かってきます！」

「なんだと！すぐにモニターに出せ！」

私が驚いていると突然アラームが鳴り響くと友里さんがモニターに接近してくる物体が映った。

その正体は——

「たっだいまゝ、ようやく龍になれたにやゝ」

顔以外が龍になったネコアルクの姿がモニターに写し出されていた。

それを見た私はプツンと切れた音が私の中からしたと感じた後、師匠に声をかけた。

「……………師匠」

「な、なんだ響君？」

「ネコアルクを仕留め行きます」

私は驚いて言葉を失っていた師匠に声をかけると、単身での出撃を要請した。

「し、しかし一人で行かせるのは……………」  
「お願いします」  
「わ、わかった……………許可しよう」

私は師匠にお礼を言った後、他のみんなに手を出さないように笑顔で言ってからネコアルクを仕留めに向かった。

全く、今からそつちにいくからソゴデオトナシクシテネコアルク？。

——響視点、終了——

## 本編

シンフォギアの世界にネコアルクを投入したら面白  
おかしくなるんじゃない？

アチシの名前はネコアルク。にやまえ

だが、アチシはネコアルクであってネコアルクではにやい。

アチシには前世の記憶がある。

いわゆる転生者というのにや。

まー定番の神様転生という神様のミスで死んしまった男のアチシは、その神様に特典は何が欲しいって聞かれネコアルクになりたいと頼んで今のネコアルクの姿になったのよ。

ネコアルクになった後、出されたくじを引いてから今の世界に転生したにや。

最初にこの世界に転生した時は、特典間違えたか？と思ったが、なんだかなだあって元気に過ごしてるにや。

この世界には人間を襲うノイズというへんにやのがいて、そのノイズに対抗するシンフォギアという鎧を纏う装者って奴らがいるにや。

まー、今はノイズはその装者達によってソロモンの・・・鍵？杖？ま、どっちでもいいにや。

・・・を使つてノイズがうじゃうじゃいるば、ば、バビロンニア？の宝物庫ごとノイズを封じ込めたという訳にや。

その後魔法少女事変というめんどい事件が起こって装者達は色々大変目にあつたが、アチシの華麗かっれいな活躍により事件が解決したにや。

装者達はアチシの力にメロメロよ・・・。

フ、アチシの素晴らしすぎる才能がニクいぜ・・・。

そんなにやアチシが今にやにをしているのかというと・・・。

「ネコアルク！炒飯五人前追加！急げ！」

「はい、了解にや！・・・へい！炒飯五人前お待ち！」

「早っ!?!」

S. O. N. G. という組織で食堂の調理師をしていたり。

「ネコアルク! 船内の通路の掃除お願いね!」

「了解したにや!」

時にS. O. N. G. の潜水艦内の掃除をしてるにや。

にやーんでこうにやっただろう・・・。

まーこんな感じに過ごしてるけど、アチシは満足しているにや。

食堂の賄いはうまいし、掃除の後は飴をくれるからこれはこれで満足にや。

だが、アチシはこんにやとところで収まる器ではにやい。

いつかはこのS. O. N. G. を牛耳り、そして最終的にこの世界をグレートキャッツビレッジに変えるのがアチシの夢にや。

人類よ、待っているがいい。

フ、フ、フ、アーハツハツハツ!

「見つけたぞ、この性悪猫」

ガシツと聞き覚えのある声のアチシのプリチーな頭を掴まれた。

「お、おやー奏さん。一体にやんのごようで?」

チラリと視線を背後に回すと据わった眼でアチシを見下ろす天羽奏さんがそこにいた。

「何の御用・・・だと? 惚けんなよ?」

奏さんは口元をヒクヒクしてアチシの言葉に反応する。

・・・まさか、少し前に奏さんの衣類を猫柄にしたのがバレたのか?  
?

・・・フム。

「キャッツフラッシュユ!」

ーカッ!ー

「眩し!?」

お仕置きされる前に脱出だ!てなわけでキャッツタワーボ!

説明しよう!キャッツフラッシュとは真祖ビームをただの光にして放ち敵の眼を眩ませる!

この世界でアチシが身に付けた最初の技にや!

キャッツタワーボとはアチシの足をマンガみたい回転させてその場から高速で走り去るこの世界で身に付けた二つ目の技にや。(さすがに艦内だから遅めにやけど)

「こら待てー!」

フ、フ、フ、待てと言われて待つ馬鹿はいにやいのよ奏さードンツアウチー!

「そこにいたか・・・この化け猫め」

あんれー!?奏さんに続いて翼さんもお怒りのご様子!?にやぜに!?!初めてだぞ、あんな屈辱は・・・」

屈辱?はて?アチシはお胸の小ささに悩んでると思って彼女の元に2リットルの牛乳を手紙と一緒に置いておいたのだが・・・にやぜに?」

「今日という今日はもう我慢ならん今この場で・・・斬る!」

ヤバイ刈られる!?(アチシの命が)

「キャッツスモーク!」

ーボフンツー

「くっ、小癩な真似を!」

説明しよう!キャッツスモークとはアチシのスカートから煙幕を放ち敵から身を隠す技!もちろんこの世界で身に付けた三つ目の技にや。

さて、どこで身を隠すべきか?

「見つけたデス!」

「私達のおやつを食べて許さない!」

おっとー!きりしらコンビ!?

「ネコアルク!あなたね、私の髪にこんな耳を着けたのは!」

「ね、姉さん、落ち着いて。似合ってるよ」

あつらー！マリアさんにセレナちゃん!?

「この馬鹿猫！誰がツンデレだ！誰が！」

あらやだ、クリスちゃん!?

「そこに隠れてたかこのアホ猫」

キャロル嬢まで!?

「追い詰めたぞ！」

「覚悟しろネコアルク！」

しまった！追い付かれた！

「あ、あのにゃさん、一旦落ち着いて話し合いませんか？ね？」

「」「」「できるか!!」「」「」

デスヨネー(ΦωΦ)

「ご、ごめんにゃさーい!!」

「」「」「逃がすかー!!」「」「」

「行っちゃった」

「あれ？セレナちゃん？どうしたの？」

「あ、響さん。未来さん」

「もしかしてまたネコアルクが何かした？」

「はい」

「あー相変わらずだねーネコアルクは」

「そうだね」

「あの人？は前からあんなだったのですか？」

「うんそうだねー。初めて会った時は新種の生物!?!って驚いて捕まえちやったくらいだしね」

「うん、その時にあの変な技を使ってきたしね」

「そうそう、私驚いて思わず地面に叩き着けちゃったよ」

「そ、そうなんだ」

「ギヤアアアアアツ!!?」

「あ、捕まっただみたい」

「ネコアルクもいい加減懲りたらしいのに」

「あははは・・・」

## アチシはネコアルク

アチシの名前はネコアルク。にやまえ

定番の神様のミスってやつにより特典としてネコアルクになってこの世界に転生したにや。

え？アチシが今にやにしてるかって？

フ、フ、フ、聞いて驚くにやよ？実は……。

「待ちやがれ、馬鹿猫！人の頭に勝手にこんなものを着けやがつて！」

頭の上に銀髪に合う可愛いネコミミを着け、顔を真っ赤にしたイチャバルを纏ったクリスちゃんに追いかけてるにや。(さすがに艦内なので武装は出してにやいが)

「だーって、クリスちゃんってアチシより猫っぽいからネコミミ似合うかにやーと思って……生やしてあげたにや」(ΦωΦ)ドヤア

「生やすなーし、しかも……耳だけではなく、尻尾も生やしやがつてえええええつ！」

怒った声と共に耳と一緒にピョコンつとその髪と同じ銀色の長いシツポが上に突き立つ。

「あらやだ！可愛いシツポ！スゴーくお似合いですよ？」

「ふざけるな！これのせいであの馬鹿に顎を撫でられたり、尻尾を握られて、その……」

ん？にやぜにどもる？……あ、にやーるほど。

「気持ち良かったと？」

「い、言うなあああああつ！！」

おおっ!?凶星を突かれて真っ赤だった顔が全身にまで真っ赤になって更に走る速度が上がり、アチシの背後1Mまで迫ってきたよこの娘!?

「あと少しッ！」

って驚いている内にクリスちゃんの手がアチシに届きそうに！

だが甘い！

(ΦωΦ)??ーキラーンッー

「キャッツシャドー！」



「スカーター」

「なあッ!?」

クリスちゃんの伸ばした手がアチシの身体をすり抜けて驚きの声をあげる。

説明しよう! キャッツシヤドーとはアチシの身体を5秒間だけ影のように実体を無くす事で相手の攻撃から身を守る事ができる。この世界で身に付けた六つ目の技にや!

「にゃはははははははっ! 甘い! 甘過ぎるにゃクリスちゃん! このアチシを捕まえるにはまだまだ修行が足りんよ!」

おっと、5秒が経つたにや。驚いている内に直ちに撤退! キャッツターボ発動! (艦内なので遅めにね) さらに!

(ΦωΦ) エエーギンツ!ー

「く、待ちやがれ!」

・  
・  
・

「ネコアルク、またクリスにイタズラしてるね」

「全くネコアルクったら、クリスちゃんにネコミミ生やすなんて・・・教えてくれてもいいのに!」

「いや、止めようよ響。そのせいでクリスに頭叩かれたでしょ?」

「いやー、あの姿のクリスちゃんを見たら我慢出来なくてつい・・・」

「・・・まあ、確かに可愛いかったね」

「だよねだよね!」

「む? 立花と小日向か?」

「オツス二人とも」

「あつ、翼さん! 奏さん!」

「こんにちは」

「何を見て・・・ああ、あいつか」

「今日の被害者はクリスか」

「はい、ネコアルクだったら寝ていたクリスにネコミミと尻尾を生やしてしまつて、それを知つたクリスが怒つて追いかけて回してます」  
「なるほどね。だからクリスにネコミミと尻尾が生えているのか。お？惜しいな。後少して捕まえそうだったのに」

「まあ、油断していた雪音も悪いがネコアルクは相変わらず手癖が悪いな。む、フエイントを交えて方向を変えてかわしたか、やるな」

「まあ、ネコアルクはああ見えて寂しがり屋さんだから構つて欲しいんですよ。きつと」

「寂しがり屋？あいつが？」

「そうは見えないが？」

「まあ、普段の言動と行動を見たらそう思いますよね」

「そういえば二人はネコアルクと長い付き合いだったな？」

「いつから知り合つたんだ？」

「うーん、いつ頃だっけ？」

「確か私と響が小学生の頃だったかな？」

「そうだっけ？」

「うん、そうだよ。確かあれば小学校の帰り道で・・・」

### 小学生時代

「みくちゃん、ひびきちゃんまたねー！」

「うん、またね」

「また明日ー！」

小学校が終わつて友達と別れた帰り道で私と響は一緒に下校していると、登下校の時によく通る公園で響が公園で何かを見たとつて公園に立ち寄つた事が始まりでした。

「ねえ、ひびき。本当に何かをみたの？」

「うん、確かに何か猫みたいなのがチラリと見えたよ」

「みたいて、もし変な生き物だったらどうするの？」

「へーき、へっちゃらだよ。ちよつと見てみるだけだからさ」

「もう・・・わかったよ。少しだけだよ？」

「えへへ、ありがとね。みく」

当時の私は小さかった響を止めようとしたけど、響の言葉を聞いて一緒にその何かを見たという場所に向けて奥まで進んでいくとそこには・・・

「ウーム・・・さすがに2週間も公園で野宿は辛いにやあ。水はともかく、この辺りってなーかなか食料がないんだよねー」ε|| (?!).? )

そこには、簡易的に作られた段ボールと木の枝と葉っぱでできた小さな家の前に木の実をちびちびと食べていたネコアルクと出会いました。

「何あれ？」

「ネコ・・・なのかなあ？」

「ネコってしやべる動物だっけ？」

「さあ、わたしの記憶ではしやべらないと思うけど・・・」

初めてネコアルクを見た私達はあれがなんなのか解らず、しばらく観察してました。

「・・・よし、捕まえよう」

「ええー、本気なのひびき？」

しばらく観察していると響がネコアルクを捕まえると聞いて本気で捕まえるのか質問すると「珍しいしなんかかわいくみえたから」って言って身を低くしながらネコアルクの背後にゆつくりと近づいて行った。

「フウ、明日はどうすっかになー？」

木の実を食べ終えたネコアルクは公園で拾ったペットボトルに入れた水を飲みながら、明日の事を呟いていると・・・

「……てりや！つつかまえたー！」

「にやにやあつ?!にやんだにやんだ!?!」

「君どこからきたのー?名前は何て言うの?」

背後から忍び寄った響に飛びかかられ捕まったネコアルクは驚いて短い手足をばたつかせて、必死に逃れようとしたけど響に抱き抱えているからその拘束から逃げられないでいた。

「えーい!どこのだれだか知らにやいが、アチシを捕まえるなんていい度胸にや。喰らえ!真祖ビームから編み出したアチシのオリジナル技第一号!その名も……」

そう言ったネコアルクは眼を光らせながら、顔を響の方に向けて眼から眩い光を繰り出した。

「キヤッツフラーツシュー!」

(ΦωΦ)

(??ω??)ーピッカーー!ー

「ひびきー!」

「うわあ!まぶしつ!?!」

ーブンツー

ーベシンツー

「あぼるあつ!?!」

咄嗟に目を瞑った私は、ネコアルクを抱き抱えている響に声をかけると光に驚いた響は抱えていたネコアルクを地面に向けて頭から叩きつけた。

「グフツ……このアチシを倒すとはにやかにやかやるにやお嬢ちゃん。

完敗だ、ぜ……ガクツ」(×ω×)ーボタンキューー

そう言った後、目を回しながらネコアルクは気絶した。

「……」

「結局なんだろうこれ?」

「さあ?」

それが私達とネコアルクの出会いでした。

「という訳です」

「懐かしいなあ」

「ほー、なるほどねー」

「そんな事があったのか」

「はい、その後は響の家に居候してバイトをしながらリディアンに行くまで過（こ）してました」

「ん？ちよつとまで、立花の家に居候はまだいいとしてあんな姿でバイトをしてたのか？」

「そうですよ？別に生活費は気にしないでって言ったけど、ネコアルクったら変に律儀でバイトで稼いだお金を必要分以外全部渡してきましたし」

「確か面接の時、目と目を合わせて話し合ったら一発で採用されたって言ってたようなの？」

「いや、絶対何かしてるだろそれ」

「どりやあ、捕まえたあ！」

「にやにやあっ!?!しまったにやあっ!?!」

「あ、終わったみたい」

「日に日に逃げる時間が短くなってるな」

「うむ、雪音も成長したな」

「いや、多分シンフォギアを纏ったら常人より身体能力が上がったからじゃ？」

「さあ、覚悟はいいな？馬鹿猫？」

「ひいひいひいっ!!ど、どうかお慈悲を、お慈悲をおおおおおっ!?!、（。ロ。）ヒイヒイイ！

「そろそろ止めよつか未来？」

「そうだね、響」

「二人とも」

「はい？」

「二人はネコアルクの事はどう思っているのだ？」

「どうって・・・」チラリ

「勿論・・・」チラリ

「ニコッ」

「かけがえのない友達で家族ですから！」

終わり

## プリチーガールと会った話にや

アチシはネコアルク。

定番の神様転生でネコアルクになった転生者にや。

いやー前回はひどい目にあつて大変だったにや。反省反省。

今回はその反省を生かして、クリスちゃんに突撃しに行つてみたんにやけど・・・

クリスちゃんに勘づかれて捕まったんにやよねー(ΦωΦ)ニヤハハ

みのむしみたいにぐるぐる巻きに吊るされてるにや。とゆーか、クリスちゃんよくアチシを吊るせにやね？

椅子を使つて頑張つて吊るそうとした姿を見て思わず萌えちゃつたよ。

「お前、まーた懲りずにあたしにちよつかいだそうとしたな？」

おおぅ・・・クリスちゃんが怒り心頭で髪がゆらゆらと揺れてるにや。

「んで、今度は何をしようとした？」

え？何つてクリスちゃんにネコミミ尻尾を生やした後、アチシのはや着替えて特性キャッツスーツを着て、愛されキャッツガールにしようとは口が裂けても言えにやいにや」

「ほほーう？そうか、そうか。そんな事をしようとしたのか？」

「にやにやつ?!にやぜ言つてもないのに解つたにや?!まさかエスニヤー!？」

「それを言うならエスパーな!!てか、お前が勝手に喋つてたぞ!!」

がーん!!まさか・・・アチシが無意識に喋つていたとにや・・・。ネコアルク一生の不覚!

「それじゃあ・・・お仕置きだ」

あ、クリスちゃん出来れば優しくして・・・つて言つても出来にやいよね？

「ははは、解ってるじゃねーか」

デスヨネーアハハ（ΦωΦ）シツテタ

「あにやあああああつ?!?!」

・  
・  
・

クリス視点

全くあの馬鹿猫は！毎回毎回同じ事を繰り返しやがって！

何回、あたしを怒らしたら気がすむんだよ全く！

大体あたしがネフシユタンを纏って出てきた時も場をかき回しただけじゃなく・・・

『おー顔隠してるから下なら覗けるのにやと思つてやつてみたけど、下から見ても顔が見れにやいねー。翼さんとは逆にやねホント「ふんっ！」ぐぼろお!?!』

その言葉の後、足元にいたあいつの顔を地面に踏みつけるのとあいつの言葉を聞いた。当時、敵同士だった先輩があいつを地面に踏みつけるのは同時だった。

好きででかくなつた訳じゃねーよ。結構辛いんだぞ？走ると痛いし肩も凝るし。可愛い下着は少ないし・・・。

と、とにかく！本当に失礼な奴だ！

・・・でも、初めて会った時は楽しかったんだよなあ。

確か、あれはあたしがまだ幼くて、まだパパとママが生きていた頃だっけか。

・



当時のあたしはパパとママが歌で紛争を止めようと活動していた時、あたしは邪魔にならないように借りていた家の庭で一人で過ごしていた事だった。

「♪♪♪．．．うーん、ママみたいにうまく歌えないな」

この時はママと一緒に歌った歌を練習していたけど一部の音程が難しく苦戦していた。

「よし、ママが帰ってきたら教えてもらおう！」

そう決めて上を向いたその時だった。あいつと．．．ネコアルクと初めて会ったのは．．．

「ぎにやあああああつ!?．．．ぐへっ!!」

ーズドンツ!!ー

「キヤアアアアツ!?!」

出合い方は最悪だったけど．．．

「あ、あの．．．大丈夫、夫?」

落下して地面に人．．．というか猫の形の穴に恐る恐る近づいてみたあたしはネコアルクに声をかけてみるが、穴からは返事はなく、どうしよう困っていた時、後ろから声がかかってきた。

「いやー今のはさすがにヤバかったにやー」

「キヤアアアアツ!?!オバケエエエツ!?!」

大げさかもしれないけど、落下して地面に穴開けたのにいつの間にか後ろに立って、傷一つもなく普通に喋っていたらびっくりするだろうか?

「ちよつとちよつとー、こんなプリチーな見た目にオバケとは失礼でしよっ。」

いや、見た目化け物だろ。

「失敬な！」

回想なのにこっちに反応するなよ!?

「え、でも上から落ちてきたし、それに何で空から?」

「それにやねー・・・これにや」・(・ω・)ゴソゴソ

そう言っただけから出したのか解らないけど、日本語で【世界のスイーツ特集】と書かれた雑誌を見せてきた。

「居候先の少女がこの雑誌を見てね。『食べてみたいなー』って言ってね。それを聞いたアチシは『よし、任せろー』って言って現地に飛んで行っただけにや」

「へーそうなんだ。でも飛んで行っただけでどうやって?人は飛べないよ?」

「フ、フ、フ、アチシをただの猫とは思うにやよ?それは・・・これにや!-とうっ!」

「(ΦωΦ)」「??ピヨン

(ΦωΦ) シュゴゴゴ

???????

「・・・」

「その名も、キャッツフライジェット!」

「本当に飛んでる!?!」

二本足で立つ猫が飛ぶ、あり得ない光景に当時のあたしは素直に驚いたよ。

「でしよー?んで、色々な国を回ってる途中でこの国の対空システムに引っ掛かって撃ち落とされちゃっにゃんよ、まーキャッツストレージに入れてあったスイーツは無事だったからまあいいけどねー。にやはははー!」

ヒュー

???????

(∧3∧) ニヤハハースタッ

普通は撃ち落とされて地面に穴ができるくらいの速度で落ちたら

笑い事ではすまねーよ。

「まあ、アチシだし！」

だから回想なのに反応するなよ!?

「そうなんだ、すごいね」

「フフン、まねー。ところでプリチーガールはここで一人でなにしてるのにや?」

「プリチー?えとね、パパとママが明後日までお仕事行ってるからあたしは一人でお留守番なの」

「ほほーう?一人で?」

「うん」

それを聞いたあいつは少し考えてると、閃いたとポンっと丸い手を叩いてあたしにこう言った。

「プリチーガールのパパとママが帰ってくるまで、アチシと遊ばにやーい?」

「え、あたしと?いいの?」

「もちのロンー!」

古いよ。

「えっと・・・じゃあ、よろしくね?えーと、あなたの名前は?」

「アチシ?アチシの名前はネコアルクにやまえにや!よろしくにやプリチーガール!」

「あたしはクリス。よろしくねネコアルク」

「おうともー!」

それからパパとママが帰ってくるまでの三日間、あたしとネコアルクの奇妙な生活が始まった。

いつもパパとママと一緒に世界中を回って他の遊びを知らなかったあたしにとって、お手玉やトランプ等二人でもできる遊びは初めての体験で沢山遊んだ。

中でも記憶に残っているのは・・・

「こ、こころ?」

「そうそう、最初は慣れるまでゆっくり回しながら飛ぶにや」  
「う、うん」

なわとびを知らなかったあたしにネコアルクはなわとびを取り出して飛び方を教えて貰っていた。

「上手い上手い。で、慣れてきたら徐々に早く回してみるにや」

「うんー」

ーピョンツ！ピョンツ！ー

「そうそう・・・ん？クリスちゃん？にゃんか徐々にアチシに近づいてにゃい？」

その言葉の通り、飛ぶのに夢中になってた当時のあたしはネコアルクの声に気付かない程に集中していた。

「うんしょー！よいしょー！」

「やっぱり近づいてるよね!?マジで近づいてるよね!?クリスちゃんストップ！ストップ!!」

でも、声かけに気付かないあたしはネコアルクにどんどん近づいて行ってそして・・・

??／ヒュン！（ΦωΦ）

（Φω／Φ）ーズビシツ！ー

「あ痛っにやああああああつ!!」

あたしがようやく気付いたのは、振り回したなわとびがネコアルクの顔を思い切りぶち当てた後だった。

「ごめんね、ネコアルク」

「いんやー、夢中になるほど気に入ってくれにやから、これくらい大丈夫、大丈夫」

「でも・・・顔に赤い線が付いてるよ」

「にやはははっ！これくらい少し経てばすぐに治るにや！はい、ご飯にゃよ」

「わあー！オムライスだー！」

「にゃふふふ、召し上がれ」（ゝωゝ）

「いただきまーす！」

ママが作ったオムライスとは違う味にあたしは夢中で食べ続けた。

「ちそうさまー！」

「にゃい、お粗末さま」

「ネコアルクってご飯作るの上手だね！」

「いんやー照れるにゃー」(ΦωΦ)ゝ

「でもママが作ったオムライスが一番おいしいけどね！」

「にゃんとお!?!」Σ(ΦωΦ)ガーン！

あたしの言葉を聞いたネコアルクはショックを受けて四つん這いになる。

「まあ、いいにゃ。子供の食べるご飯はママのが一番にゃし。ほい、食後のデザートにゃ」

「わあ！ネコアルクにそっくりのケーキだ！」

冷蔵庫から取り出したのはネコアルクの顔を模したカップケーキだった

「でもパパとママが誕生日とかお祝い以外で夜にケーキとか食べちゃいけないって……」

「ん？なら大丈夫にゃ」

「え？」

「にやって今日はクリスマスちゃんとアチシが友達になった記念日にや。だから食べちゃっていいんにゃよ」

「っ！」

不意打ちだった。当時のあたしはパパとママと一緒に世界中を回っていて友達を作ることが出来なくて、ネコアルクが言った言葉を聞いて胸が熱くなった。

「ネコアルク……ありがとう！」

「おっと、にゃははは、良いつてことよ」

その言葉を聞いたあたしは嬉しくなって涙を流しながらネコアルクに思わず抱きついたな。

それからあつという間に三日が経ち……

「本当に帰っちゃうの？」グスツ

「そうにゃよー。そろそろ帰<sup>かえ</sup>にゃらいと居候先の少女が心配するしー。それにクリスちゃんのパパとママがお昼には帰ってくるでしよ？」

「うん・・・」

パパとママが帰ってくる日の朝、ネコアルクが日本に帰るのを見送ろうとしたけど、幼かったあたしは別れるのが寂しくなりまだ一緒にいてくれないか質問したがネコアルクは難しい顔をして断った。

「でも、あたしいつまでもこの国にはいられないし、次はまた会えないかも・・・」

「うーむ、クリスちゃん」

「?なーに・・・むきゅっ!?!」

泣きそうなたたしをネコアルクはその丸い両手で挟み込んで頬つぺたを持ち上げて顔を近づけてきた。

「大丈夫にや。どんなに離れてもアチシとクリスちゃんの友達の絆は絶つ対に切れにやいよ」

「ほ、本当?」

丸い手が離れて頬を擦りながらネコアルクに質問する。

「本当にやよ、にやから安心するといいにや。大丈夫、例えクリスちゃんが変わつてもアチシだけはクリスちゃんのことを忘れにやいよ」

「ネコアルク・・・」

「そろそろ時間にや」

(ΦωΦ) シュゴゴゴ

???????

あたしが火傷しないように離れたネコアルクはスカートから炎が吹き出しながら徐々に空へと飛んでいくのをあたしは泣くのを我慢して手を振った。

「ネコアルクー!絶対、ぜーったいにまた会おうねー!」

(ΦωΦ) /~~~~バイバイニャー

それからネコアルクが見えなくなるまであたしは手を振り続けた。

・  
・  
・

現在

んで、再会した途端にセクハラをかましたり、あたしや先輩達にイタズラをしたりと、・・・あたしとの約束忘れたんだろーな・・・

「ばかやろう」ボソツ

「あのークリスマスちゃん？」

っ!?

「な、なんだよ！今さら謝っても許すかよ！」

「えーと、はい！これどうぞ！」

「だからそんな事しても・・・っ！これって？」

腕を組んでそっぽを向いてるとネコアルクは後ろ手に隠してた何かをあたしの前に出してきてそれを見たあたしは見覚えがあるそれに思わず驚いた。

だってそれは・・・

「これって、あの時の？」

「そうにゃ」(ΦωΦ)

そう、あの時ネコアルクが友達になった記念に作ってくれたあのカップケーキだった。

「でも何で？」

「えつとね・・・今さらにやけど、今日ってアチシとクリスマスちゃんが初めて友達になった記念日にやんだよねー。んで、色々準備しようとしたんにやけどことごとく失敗しまくってねー。にやははは・・・」

まさか、あたしにあんなイタズラをしたのは、これの為に？

「まあ、準備出来たのがこれにやけににやっただけ・・・」

ネコアルクはどこから出したのかりボンで結ばれたプレゼントの小箱を取り出してあたしの手を持たせてきた。

「クリスマスちゃん、これからもやかよくしよーにや！」( ^ ω ^ )

・・・全く、こいつは。

「しょうがねーな、当たり前だろ！お前はあたしの初めての友達だからな!!」

こんな奴だけど、あたしはこいつが好きだからな！

終わり

おまけ

「ところでさ、お前はあの時会った時あたしと気付かなかったのか?」

「え?あの痴女い格好の時?最初から気付いてにやけど?」

「・・・はあ!?!気付いてたってどうしてだ!?!あの時はバイザーをしたのになんでだ!?!」

「にやーって、色んな所が成長してもその愛されオーラが溢れていにやから、すぐにクリスちゃんってわかったにや」

「・・・そう言うことは」

「にや?」

「先に言えよバカアアアアアアアアアツ!!」

「あにやあああああああつ!?!」

今度こそ終わり



シリアスシーンの空気を読まにやいそれがアチシにや その1

アチシはネコアルク。神テンプレした転生者にや。

このくんだりはもう飽きたと思う読者もいると思うが、アチシの事を知らにやい読者がいると思いい言ってみるのにや。

前回のクリスちゃんと友達記念のお祝いをして数日が経ったある日、アチシはS. O. N. Gの仕事が一通り終わって暇を潰そうと考えていた時だったにや。

「おや?」

「あ、お前か」

ちょうどS. O. N. G. に待機していた奏さんとぼったり鉢合わせしたにや。

「これにやこれにや奏さん、どうもこんにちにや」

「おう、ネコアルクは今日は何してんだ?」

「いやー、仕事が一通り終わつにやんで、空いた暇をどう潰そうか考えてたにや」

「ふーん、いつも思ったけどお前っていつもどう過ごしているんだ? 後、口調を統一しろよ。ブレブレだぞ?」

「いつも? んーと... S. O. N. G. の仕事かにやい時は響ちゃんとか未来ちゃんがいにやい間に掃除とか洗濯物を干したり畳んだり、日向ぼっこをしたり、近所の野良猫達と井戸端会議したり、弦ちゃんと一緒に映画を観てそのアクションシーンを真似て一緒に特訓したり、みんなにやにイタズラをしたりと色々してるにや。口調がブレブレにやのはアチシがネコアルクだし、作者の力不足だからしようがにやいにや」

「メタいよ。そしてイタズラするな」

しょうがにやいにや。作者の文才がないのが悪いんにやし。それにイタズラはアチシの生き甲斐にや。

「まあ、いいけど暇なら少し付き合ってくれよ?」

まさかの突然の告白!?

「にやにやつ!? 奏さん・・・いくら男の気配がにやいとはいえ、アチシと付き合って欲しいとは正気かにな?」

「なっ!? ち、違うって! 今日にはあたし以外の装者がいないから、特訓相手になってくれって意味だよ!」

「知ってるー。言ってみにやだけにや」

「こいつ・・・!」

いやー、奏さんって姉御肌で、あまり弄られる事が少にやいからからかいがあつて楽しいからにや。にやはははっ!

「・・・はは、よーしわかった。そんなにあたしと激しい特訓がしたいのかー。そうかそうか、なら早速行こうか? 大丈夫、ギアは使われない模造槍だから安心しろ」

あれ? か、奏さん? にやーんかお顔が怖いですよ?

「ハハハハ、キノセイダ」

にやぜカタコト!? 怒ってるよね!? どう見ても怒ってるよね!?

あつ、待つて奏さん! アチシの耳は掴む所にやな・・・アイダダダダダツ!?

・  
・  
・

## 奏視点

あたしがネコアルクを見た最初の印象は猫型の宇宙人? が真っ先に思い浮かんだ。

そもそもあいつとの最初の出会いはあの日のライブ会場で起きた事件の時だった。

あの時、当時まだシンフォギア装者ではない響がノイズからの攻撃を防いで碎けたあたしのギアがああ娘の胸に突き刺さってしまった、駆け寄って生きろと声をかけた後、絶唱を唄おうと息を吸った瞬間。

ーボコッ！ー

『突然地面からの、キャッツドリルアッパー頭突き!!』

ーズドン！ー

『グハアッ!?!』

『奏!?!』

いきなり地面から飛び出してきたネコアルクの回転がかかった頭突きが腹に直撃して、あたしは響を座らせた場所まで吹き飛ばされた。(後で翼に聞いたけど、綺麗な放物線を描いていたってさ)

『む！響ちゃんとは離ればなれになっていた間に響ちゃんが血塗れになつてるにや!?!ああ！しかもなんかきわどい格好したお姉さんが倒れてる!?!一体誰がこんなにや事を!!』

お前だよお前、あたしを吹き飛ばしたのは。

『ええい！よくもやってくれたにや！その・・・にやんかカラフルなイロモノもお!!』

いやイロモノなのはお前も負けてないから。

『フ、フ、フ、チョーっと数が多いからって調子乗るにやよ?見せてにやろう・・・アチシが偶然編み出した奥義!』

ネコアルクが両手を上に上げて、繰り出そうとした技名を叫ぶ。

／(ΦωΦ)／バツ

『出ですよ！別次元のネコアルク達よ！アチシの友達の響ちゃんとそのきわどいお姉さん達を助けたまえー！奥義、ネコアルク大召喚!!』  
待て！なんだその嫌な技名は!?!

その言葉の後にネコアルクの背後の空間が歪んで丸い黒い穴が開き、そこから出てきたのは・・・

ーニユーンー

ネコアルクが一匹 ● 〓 (ΦωΦ) ニヤ

ネコアルクが二匹 ● 〓 (ΦωΦ) ニヤ

ネコアルクが三匹 ● 〓 (ΦωΦ) ニヤ

ネコアルクが四匹 ● 〓 (ΦωΦ) ニヤ



(Φ ω Φ) (Φ ω Φ) (Φ ω Φ) (Φ ω Φ) (Φ ω Φ) (Φ ω Φ)  
(Φ ω Φ) (Φ ω Φ)  
(Φ ω Φ) (Φ ω Φ) (Φ ω Φ) (Φ ω Φ) (Φ ω Φ) (Φ ω Φ) ↑約30  
0匹

(?? ω ??) キラーン (?? ω ??) キラーン (?? ω ??) キラーン (?? ω ??)  
キラーン (?? ω ??) キラーン (?? ω ??) キラーン (?? ω ??) キラーン  
(?? ω ??) キラーン (?? ω ??) キラーン (?? ω ??) キラーン (?? ω ??)  
キラーン (?? ω ??) キラーン (?? ω ??) キラーン (?? ω ??) キラーン  
(?? ω ??) キラーン (?? ω ??) キラーン (?? ω ??) キラーン (?? ω ??)  
キラーン (?? ω ??) キラーン (?? ω ??) キラーン (?? ω ??) キラーン  
(?? ω ??) キラーン ↑約300匹

『『『『ビイイイムツ!!』』』』 ↑約300匹

ネコアルクに続くように他のネコアルク達も目から凄まじい光の  
ビームがノイズ達に向かっていく。そして……

ーチユドーンツ!!ー

『『『『……』』』』

ネコアルク達が繰り出したビームによって、大量にいたノイズの群  
れを一つ残らず殲滅した。

『ふー、終わった終わったあ……あ、あんがとねーお疲れちゃーん。  
また何かあったらお願いねー?』

『『『『にゃーっー!』』』』 ↑約300匹

あたしと翼がまだ驚いている中、ネコアルクは他のネコアルク達に  
声をかけて穴を広げて元の世界?に返していた。

『な、なんなの……あれは?』

『さあな?けど、あいつのおかげであたし達は助かったのはたしかだ  
な。でも……』

あたしは一度区切ってから視線をノイズ達がいた場所を見て続き  
を話す。

『あれはやり過ぎだろ』

そこにはネコアルク達が放ったビームのせいで巨大なクレーター

ができていた。

・  
・  
・

その後ネコアルクは姿を消して、次に出会ったのは2年後のガングニールを身に纏った響の傍にしろつといた時は普通に驚いたなあ……まあ、その後の二課に戻った出来事が一番驚いたけどな。

でも……

「ぜー、ぜー、ぜー、か、奏さん。そ、そろそろ終わりにしにやい?」  
あの時、こいつがあの場合にいなかったら、あたしは今ここにはいなかったらうな……

「ありがとな……」ボソツ

「え?今にやんて言ったにや?」

「ん?何でもねーよ!そらっ!」

礼なんて言ってたなんて恥ずかしくて言えねーよ!

あたしは礼を言ってたのを誤魔化すようにネコアルクに模造槍を突きだした。

「あにやあ?!まだやるのにや?!もうそろそろ他のみんなにやも来る頃にやよ!」

「まだかわせる体力があるなら大丈夫だ!それにみんなが来るまで後30分も残ってるからな、それまでもう少し付き合ってくれよな!」

「どひいひいひいっ?!この体力おバカアアアッ!」

「んだとコラア!もう一度言ってみろ!猫型宇宙人っ!!」

「しまつにや!藪蛇だったにや!?!ちよ、奏さん待っ……」

「オオオオラアアアアアアッ!!」

「イイイイヤアアアアアアッ!!?」

まあ、イタズラばかりする奴だけどき……あの時、あたしを助けてくれてありがとなネコアルク。

終  
わ  
り

シリアスシーンの空気を讀まにやいそれがアチシにや その2

ドーモ、皆様。アチシはネコアルク。

今アチシがどこにいるか解るかにや？それにやねー？

にやーんか綺麗な川が流れていて、沢山の綺麗な花畑の上に立っているにや。

にやーんでここにいるんにやっけ？

えーと、確か小腹が空いて食堂でにやにか軽い物でも作ろっかなー？と食堂に着いたらおはぎを作っていた翼さんに会って、そこで翼さんに味見を頼まれて、ちようど小腹が空いてるからありがたーく食べようとして一口食べてみたら・・・

「ここにやんだよねー」

うーん、にやんでだろ？それしか心当たりがにやいけど・・・もしや？

「翼さんがものすごい料理下手でその料理の味が激マズにやのではー

！」Σ(ΦωΦ)

・・・にやーんてそんなにやわけにやいよねー。だってあの翼さんじゃん、その翼さんがそんな激マズ料理を作るわけにやいじゃん。(ΦωΦ)／＼ビシッ

オーイネコアルクー！

にや？何処からか声が(ΦωΦ≡ΦωΦ)？川の向こう？チラリ

「おーい、ネコアルクーー！」

にやにや!?あ、あれはまさか・・・我がネコアルク一族のご先祖達かにやあ!?まさかここは天国!?って、よく見たら三途の川じゃんこれえ!?

「おーい、なにしてるにやー。早くこっちにくるにやー」(ΦωΦ)／＼コイコイ



「そうそう、だからお前もこいにやー」(ΦωΦ) / コツチコイ  
ふにやけるにやー!? そっち行ったらアチシ死んじゃうじゃん! は、早く元の世界に戻らにやいと・・・ってにやんか身体が引き摺られているう!?

「いいから早くこつちこいにやー」(ΦωΦ)

「こないなら無理矢理連れていくにやー」(ΦωΦ)

ってあんたらのせいかー!? しかも頭に耳じゃなく角が生えてるし向こうよく見たら天国ではなく地獄だったー!?

ウオオオオオオツ! 負けるかー!! ㊄㊄ (\*Φ皿Φ) グググツ

「ムダナコトヲ」(ΦωΦ)

「オマエダケガシアワセニクラシテイルノガ、ワレラハユルサナイ」

(ΦωΦ)

いや逆恨み!? そんなにや理由でアチシをここに呼んだのあんたら!?

あ、あれ? にやんかどんどん力が強くなってるウウウウウツ!?

ちよ、誰か助けてにやああああああつ!!

・  
・  
・

### 翼視点

大変な事になった。

あの斬つてもくつついて、燃えても日焼けのように皮をめくり、潰れても風船のように膨らみ、宇宙に生身で放り込まれても死なないネコアルクが・・・

「や、メロオ・・・アチシはそっちには・・・三途の川を渡ってたまるかにや・・・」

「三途の川・・・って、既に軽く片足突っ込んでる!? ちよつとネコアルク! そっちに行ったら駄目だよ!」

「おい、馬鹿猫! しっかりしろ!」

「ネコアルク早く起きて！そっち行ったらもう戻れないよ!!」

「AEDを持ってきたわ!」

「酸素マスクお待たせデース!」

「酸素呼吸器も持ってきました!」

うわ言を呟きながら命が消えそうになったた。

「翼、お前あいつに何をした?」

「いや、以前月読と暁が私が料理上手だと思っていて、私が作ったおはぎを食べてみたいと言われて、それでおはぎを練習しようにも私の自宅は今緒川さんが掃除に入ってくれているから、それまでS.O.N.G.の食堂を借りて作った後、ちょうどネコアルクが食堂に入ってきて味見を頼んでみたら・・・」

「ああなっただと?」

「・・・うん」

AEDを繋がれようとしてるネコアルクに指を指した奏の視線に堪えられなくなった私は両手で顔を隠してしまう。

【患者に電極パッドを繋いでください】

「よし、早速・・・っておい!こいつの服どうやって脱がすんだ!」

「あ、本当だピッタリ貼り付いてる」

【電極パッドを繋いでください】

「わかってるわよ!このっ・・・あーもう!なんなのこの子の服!」

「あ、そういうえばネコアルクの服って猫と同じ毛皮と同じであるから裸でもあり服でもあるって言ってたような?」

「「それを先に言え(言いなさい)!!」」

「ごめんなさいっ!」

「よし、貼ったぞ!」

【心音を調べてます。患者に触らないでください】

「翼、人には得意な人と得意ではない人の二種類いるのはわかってるか?」

「うん・・・」

「翼とあたし、それに響と切歌、そしてクリス。今挙げた名前に共通するのはわかるか?」

「・・・戦闘「翼?」・・・料理が不得意・・・です」

「そうだ。ならマリアとセレナ、未来に調。この名前の共通するのは?」

「・・・料理が得意・・・です」

「そう、だからな翼?」

私の両肩に手を置いた奏が優しい顔をしてある言葉を私に告げた。

「無理はしないで素直に教えてもらいな?」

「うう・・・っ」

遠回しに料理をするなどと言わない奏の優しさに私は心が折れそうになった。

【・・・心音が聴こえません。心臓マッサージをしてください】

「一、二、三、四、五、六、七、八、九、十!どうだ!」

【・・・心音が聴こえません。電気ショックを流します。患者から5M程離れてください】

「みんな離れて!」

「はい!」

「離れるデース!」

AEDの指示に従ってみんながネコアルクから離れていく。

【電気ショックを流します。100万ボルトの電気が流れるのでしばらく近づかないでください】

「「「「「・・・え?」」」」」」

ーバリバリバリバリエイイイイイツ!!ー

「あにやああああああアアアツ!?!」Σ(Φ□Φ)

「『『『『ネコアルクウウウウウ（きん）ツ!』『』『』『』』』』」

「とりあえず、ネコアルクが目覚めたら謝っておけよ？」  
「・・・うん」

・  
・  
・

初めてネコアルクが現れた時は、ノイズを殲滅したその能力に驚き、その2年後に奏と同じ GANG ニールを纏った立花と一緒にいたま  
た驚いてしまった。

その時にネコアルクを見た最初の感想は、「なんだこの二本足で立  
つ化け猫は？」だった。

当時の私はネコアルクのことには嫌いだった。戦場に出れば場をか  
き乱し、周りの人にイタズラをしかける奴の存在は私にとって不快  
だった。

まあ、今となってはそこまで嫌いではないが・・・

ある時、別々の場所に現れたノイズを倒す為に奏と別れた私の元に  
ギアを纏った立花がやって来て、ノイズを倒した後、私達と一緒に戦  
いたいと言った彼女に対し私は「いいわ・・・戦いましょう」と呟き  
アームドギアを彼女に向けて斬りかかった。

『つ、翼さん!?!なんで!?!』

『解らないの?貴女が言った通り戦っているのよ?』

当時、奏が血反吐を吐いてまで手に入れた GANG ニールを何の苦労  
もなく纏った立花に当時の私は彼女を認めたくなくて、彼女を戦いか  
ら遠ざけようと剣を振りかざしていた。

『翼ちゃん今すぐ戦いをやめなさい!』

『やめろ翼!』

『違います!私が言ったのはこういう事ではなくて・・・!』

『奏が血反吐を吐いてまで手に入れた GANG ニールを貴女は何の苦勞もしないでっ！私を止めたいなら、貴女もアームドギアを展開しなさい！』

二課と奏からの通信と立花の言葉を無視した私は、剣を上投げた後、地面を蹴つて空中で巨大な剣になったアームドギアの柄に脚をかけたようにした瞬間。

ーキラーン！ー

『そーらーかーらー、キャッツロケットメテオー！』( > ω < ) トニャーッ

ードガッ！ー

『ガハアッ!?!』

『翼さん!?!』

突如、空から現れたネコアルクと空中でぶつかり、そのまま地面に向かって落下した私は剣を地面に刺して、少し離れた場所に頭からめり込んだネコアルクに向けて怒りながら声をかけた。

『グウ・・・ッ！よくもやってくれたなキサマ！何故邪魔をした!!』

『・・・ブハアッ!?!フウー、着地失敗した・・・にやんでっそりやーあんだ。人の話を聞かにも堅物を止めるためにや』( Φ ω Φ )

『私を止める・・・だと?』

『そうにや』( Φ ω Φ )

『ふざけるな！そもそも、キサマのような化け猫が何故我々に協力する!?!その目的はなんだ!?!』

当時、頭に血がのぼっていた私は怒りの矛先を立花からネコアルクに移して、ネコアルクにどうして人間に協力するのか質問して、その時の言葉を聞いた私は信じられないと目を見開いた。

『理由?そんなにやの簡単にや。いいか?一度しか言わにやいからよく聞くにや。それはにや・・・アチシは人間が好きにや。悪人でも善

人でも関係なく純粋に人間が好きにやだけにや。だから、協力する理由はそれだけにや。それに・・・』

言葉を切って、チラリと視線をネコアルクが現れてまだ驚いている立花に向けた後、再び私に視線を向ける。

『響ちゃんはアチシの大切な友達であり、アチシにとって家族みたいになものにや。だーかーらー・・・』(ΦωΦ)

ーアチシの家族を傷付けるなら、例え神様だろうが悪魔だろうが関係なくアチシが許さないー(◁●▷ε◁●▷)

『っ!?!』

人間が好き、それがネコアルクが協力する理由であり、家族である立花の為に戦うというその姿に私は息を呑み剣を握る手を緩める。

『家族。それがお前の戦う理由か・・・』

それを聞いた私は昂っていた戦意を静め、立花と私を止めてくれたネコアルクに謝ろうとした時・・・

『にやから・・・』(??ω??) / >ユラーリ

『な、なんだ!』

ゆっくりと両手を上げたネコアルクは眼を光らせたのをみた私は思わず後ずさる。

(ΦωΦ) クワツ

『それをわからせるまで、その薄いまな板にたつぷりと刻みこんでやるにやー!!』(ΦωΦ) ヒシツ

『な!?!き、キサマ!どこに捕まっている!?!それに誰がまな板だ!これでも(少しは)成長はしてる(はず)だ!』

『え?・・・(ペタペタ)・・・嘘はいかんよ?嘘は』(ΦωΦ) 「フウー

ーブチイッー

『・・・』

『ん?あの・・・にやんで無言で刀を構えてるのですか?そしてにやんで無言斬りかかるのにや!?!ちよっ!待って!ースパッーああ!?!ちよっ!と斬られたあ!?!』

その言葉を発端に私は剣を握り直して二課司令部から来た叔父様がこの場に来るまで私はネコアルクに斬りかかった。

・  
・  
・

その後、様々な戦場を駆けていく内に立花と和解し、ネコアルクを受け入れ、彼女らと共にフィーネの企みを阻止する事ができた。

「ハッ!?アチシ…生きてる!?!ニヤツタアアア「やったあああああつ!」アアアツ!」

「ネコアルクよかった!生き返って本当によかったよおおおおつ!」

「よかった…」ホッ

「この馬鹿猫!あたしらを置いて、勝手に死ぬんじやねーよ!」

「本当よ、まったく。あなたが倒れたと聞いてこっちの心臓が止まるかと思っただわ」

「そうデス!あの非常識の固まりであるネコアルクが倒れたって聞いた時はこの世の終わりかと思っただス!」

「切ちゃんそれは言い過ぎ」

「本当に大丈夫ですか?ネコアルクさん」

AEDのおかげで息を吹き返したネコアルクにみんなが集まって声をかける。

「あり?にやんでみんなにやアチシの周りに集まって何してるにや?」

「覚えてないの?」

「さっきまで心臓が止まっていたんだよ」

「まさか、さっきの100万ボルトのせい?」

「ありえる…」

「え…アチシ、そんなにヤバかったの?ねえ?」

「よかったな、生き返って」

「よかった・・・本当に」

ネコアルクが死なないでくれたことに安堵した私はネコアルクに謝ろうと奏と一緒にみんなの元へ近づいて行った。

「アチシの家族を傷付けるなら、例え神様だろうが悪魔だろうが関係なくアチシが許さない」

「家族の為なら世界中を敵に回す覚悟を持ったあいつが言ったあの言葉は今も私の胸に残っている。」

「なら私もお前に負けないよう、私は人類を護り通すよ。ネコアルク。」

それが風鳴の家に生まれた私の覚悟だ。

終わり



格好いい台詞を言っても、後から落ち着いて考えると  
黒歴史にや

ドーモ、ミニヤサン。ネコアルクデース。

コンゴトモ、ヨロシク。

うーむ、冒頭から某忍者の台詞っぽくやってみにやけど、やっぱりいつもの言い方のほうがアチシらしいってことがわかったにや。たまににやるけどね

「ん、あ……いい……」

しかしまさか、地獄から鬼になったご先祖様に三途の川に連れて逝かれるとは思わなかったにや。

(前回、翼から謝罪の言葉を受けたが何の事だか解らず、ご先祖様のせいだと勘違いしてるが、実際は翼の料理とご先祖の力がベストマッチ！して起きた事であることはネコアルクは知らない byクロトダ  
ン)

「あ……そこ……」

でもにやぜかあれからおはぎを見ると身体が震えるようになってやけど、にやんでにやろうね？

「はああああん……気持ちいいいい……」

さつきから聴こえる声に反応してイヤらしい妄想をしてるスケベボーイ達が鼻血を出すかもしれないにやいから、そろそろアチシが何をしてるのか教えてやるかにや？

それは……

「他に凝っているところはございませんにや？マリアさん？」

「んあ……ん、そうね……。次は腰をお願い」

「了解にや」

ソフアーに横になったマリアさんにマッサージをしているところにや。(ΦωΦ) ウラニヤマシカロ？

今日は、たまたまアイドルとS・O・N・G.の仕事が両方とも休みだったマリアさんの家にお呼ばれされてお茶してる時に、「最近、身体の凝りが取れないのよ」とポロつと呟いたのを聞いたアチシは「よければマッサージしよかにや？」と質問して、マリアさんから許可を得たアチシは早速横になったマリアさんの背中にマッサージをしたんだにや。

その結果……

「あ、そこ……気持ちいい……」

見事に骨抜きになったマリアさんが出来上がったにや。

「はあああ……それにしてもネコアルク、あなたってほんと多芸なのね？一体、何処で身に付けたの？」

それは企業秘密です。(企業じゃないけど)

「ん……っ！でも、ほんとにすごいわね？今までの疲労が無くなってるわ」

「でしょー？まあ、アチシのキャッツヒーリングハンドにかかれば、どんな凝りでも十代の頃のような爽快感を味わえるにや」

十代といえば、マリアさんまだ二十代だけど。シンフォギアを纏っている姿を見ると二十代には厳しいんにやね？。

「何故かしら？今あなたを猛烈に殴りたくなってきたわ。ほんと何でかしらねえ？」ジロツ

「にやんのことですかー？アチシ、ワツカリマセーン」

おおう、鋭い……！さすが影でお母さんと呼ばれるマリアさんにや。まあ、お母さんというよりどっちかって言うとおばーガツ！ーさんっぽいってイダダダダダダッ!」

「ごめんなさい、よく聞こえなかったわ。もう一度言ってもらえる？」

誰が・・・何ですって?」ギリギリッ!

アチシがついポロリとこぼしてしまった言葉に反応したマリアさんがアチシの顔を鷲掴み、力を込めながらそのまま上に持ち上げる・・・ってメチャクチャ痛いにやあつ!?

「アダダダダダッ!?!しまつにや!?!つい本音が!?!」

「つい?本音?」ギリギリギリッ!

「あにやあああああつ!?!しまつたにやあああああつ!!」

ちよ、マリアさん?!更に!?!更に力を込めるのにや!?!それ以上はヒロインが出してはイケニヤイ領域にいいいいいつ!!!?!!

・  
・  
・

マリア視点

まったく、この子はもう!なんでいつも人を弄らないと気がすまないの!?

大体、私がフィーネと名乗っていたあの時もちよつかいを出して・・・あ、あんなことをされてええええつ!!

・  
・  
・

F・I・S・時代

『私はフィーネとして宣言する!』

翼と共に歌ったライブの日、私は黒い GANG ニールを纏いフィーネとして世界中に宣戦布告した。

『GANG ニールは貴様のような者が纏っていいものではない!』

『なら、試してみましようか!』

そう言つてまだギアを纏つてない当時敵だった翼に向かつて私はマントを翻して襲いかかった。

『その程度?』

『ぐっ!』(まだだ・・・!後少し、あそこまで下がれば!)

『駄目よ、あなたはステージを降りるのは!降りたいなら私が降ろしてあげる!』

私の攻めを避け続けながらステージ外に出ようとした翼の背後に回つた私は、脚を振り上げ彼女をステージから蹴り飛ばそうとしたその時・・・

(??ω??) キュピーン

『背後からの、キャッツスタンハンド!』

ーグワシッ!ー

『っ!?キヤアアアアアアアアツ!!』

突、然!背後から現れたネコアルクに私の胸を後ろから鷲掴みされたのよ!!あのセクハラネコに!

『な、なんなのあなた!?!いきなり人の胸を掴んで!そしてどこから出てきたの!?!』

『おおう・・・なんじやい、あの胸は?掴んだ瞬間、指どころかアチシの手ごと包み込まれるようにや感覚・・・思わずマヒらせるのを忘れてしまつにやと・・・っ!?あ、アチシネコアルク。しがにやいただのネコにや。ヨロシク』

二本足で立って、人の胸を鷲掴みするネコがどこにいるのよ・・・!

『どこにいるにや!』

回想に突っ込まないでよ!?

『くっ、人の胸を・・・あのタイミングで出てきたということは、あなたも彼女の仲間なのね』

『そうにやよ？そしてアチシの友達にや！』(ノωノ)

気を取り直した私は、翼を庇ったネコアルクに質問を投げるとネコアルクは呑気に笑顔を私に見せる。

『そう、ならあなたも私の敵ね！』

ーガキインツー！

私は両腕のガントレットを合わせるとガントレットが腕から離れて槍のアームドギアに変形した。

『アームドギアだ!?気をつけろ、ネコアルク！』

『心配むよーにや』

『余裕ね？その自信はどこからくるのか、見せてもらおうわ！』

そう言って私はネコアルク目掛けて、アームドギアを突きだした！

ースカッー

『な!?!』

『残像だ・・・』(Φω・・・スー

ネコアルクの身体を貫いたと思ったら、あの子の身体が徐々に透けていくのを見た私はどこに隠れたのか辺りを見回していると・・・

『ふーむ・・・その美貌に容姿、まさに歌姫に相応しいにや。といったもアチシからしたら自分を偽っているのはバレバレにや』

『なんですって!』

ネコアルクの言葉に反応した私は、声が聞こえた方向に向いて身構えあの子に質問する。

『知りたいにや?にやら教えてにやろう・・・それはにや・・・』(??

ω??) キラーンツ

私の質問を聞いたネコアルクは眼を光らせ、身を低くした後、私に向かって飛び掛かり、丸い手を振るってきた。

『その翼さんにはにやい、お前の胸部装甲をさらけ出すことにやーっ!!必殺、キャッツアーマーブレイクツ!』

ーズバアツー！

『本当のお前を解放するにや・・・』(ーωー) スタツ

『え?・・・っ!イヤアアアアアアアアアツ!?!』

私の後ろに降り立ったネコアルクの声がした後、胸元が涼しいと気

付いて下を見てみると、胸の部分の布を破かれて・・・わ、私の胸をさらけ出されたのに気付いた私は両腕を使つて胸を隠しながら下にしゃがみこんだ。

『どうにやーお前に足りにやいのはその豊かな胸をさらけ出すことだにやー！これからは歌姫ではなくスイツチ姫マリアと名乗るがいいにやー！にやーははははーガシツ！はは・・・あの翼さん？いつの間にギアを纏つてアチシの頭を掴むんです？いいのかにや？カメラの前でシンフォギアを纏つて？』

笑い声をあげるネコアルクの背後に立つてシンフォギアを纏った翼が無言でネコアルクの頭を掴み上に持ち上げた。

『心配ない、カメラは少し前に緒川さんが止めてくれた』

後になって、私はカメラを止めるのがもう少し遅かったら、私の恥ずかしいところを世界中に中継されるところだった気付いて、この時カメラを止めてくれた緒川さんには本当に感謝したわ。

『あらそうなの？ところでさつきからアチシの頭がメキメキ言つてんにやけど、そろそろ離してくれませんか？』

『・・・その前に一つ聞いていいか？私に何がないって言った？』

『え？ないってそりや勿論、翼さんのそのナイむーブンツ！ーねえええええつ！？』

しゃべっている途中のネコアルクを翼は無言で上に高く投げた後、剣を構える。

『色々言いたい事があるが、とりあえず・・・』

ージャキンツ！ー

『少しは自重しろおっ！誰が貧乳だあああああつ！！』

【蒼の一閃！】

『ギニヤアアアアアアアアアアアアツ！！？！』

その後、私の援護をしにステージに合流した調と切歌とセレナ、奏と響、クリスが翼の応援に来ただけど・・・

1. 胸元を隠してしゃがみこんだ私
2. あまりにも無惨な姿な為、全身にモザイクがかかっているネコ

アルク

3. 防人としての顔ではなく、夜叉の顔になっている翼

このカオスな状態の光景を見てなんとも言えない空気になったのは言うまでもなかったわ。

・  
・  
・

この時のネコアルクについて思ったのがセクハラネコだったわ。

ああもう！今思い出したらまた怒りが・・・！！・・・失礼。

その後、仲間になった今でもこの子からセクハラの他にイタズラを受けている、本当に懲りないわね。

ーアチシからしたら、自分を偽っているのはバレバレにやー

ー本当の自分を解放するにやー

この時から既に私が自分を偽っているって気付いてたのね・・・いつもはイタズラばかりしてるのにな？

ねえ、ネコアルク？もし、私が本当に別人になってたら・・・あなたは気付いてくれるかしら？

ー当たり前前によマリアさん、にやってマリアさんもアチシの大切な友達にや。もしそうにやったらみんなにやも巻き込んででも取り戻すにやー

って、あなたならそう言うかも知れないわね？ネコアルク？

終わり

ケモミミ妹は姉特効が入るにや

ドーモ、ミニヤサン。

前回の話でマリアさんを怒らせてしまい頭が粘土みたいになつたとされたネコアルクです。

まあ・・・、すぐに元に戻ったんにやけどね。

今日は、S・O・N・Gの潜水艇でご飯を作っている途中で、セレナちゃんが訪ねてきて、料理長に少し離れると伝えてセレナちゃんの後を着いていき。

詳しく聞くと、いつもS・O・N・Gとアイドルの二つの仕事をしているマリアさんを労いたいというお姉ちゃん思いのセレナちゃんをお願いを聞いて、一発で疲れがぶつ飛ぶアイデアをセレナちゃんに教えたアチシは、早速準備に取り掛かった後、一緒にマリアさんの元に向かっているところにや。

「あの、ネコアルクさん？本当にこんな方法で姉さんの疲れが取れるの？」

「ん？大丈夫にや。苦労人のマリアさんがそれを見たら一発で疲れがぶつ飛んでしまう程効果抜群にや」

「うう・・・、本当かなあ？」

アチシの言葉に疑問を感じながら自身の身体を覆っている布を掴む手に力を込めるセレナちゃん。うむ、赤面しながら俯くところは高評価にや。クリスちゃんとは違う萌えを感じるにや。(——ω——)シ  
ミジミ

おっと、話してる間にマリアさんがいるシミュレーションルームに辿り着いたにや。

よっしゃ、往くよセレナちゃん。恥ずかしがらずにさあ、GO!G

O!

「あ、待ってください・・・きやつ！」

「お邪魔シマウマー！」(ΦωΦ)／バーンツ！

中に入ると訓練中なのか、マリアさんの他に調ちゃん、切歌ちゃん、



響ちゃん、クリスちゃんも一緒だったにや。(翼さんと奏さんはアイドルのお仕事で不在)

「あら？セレナどうしたの？そんな格好して？・・・ついでにネコアルク」

「本当だ何してるのセレナ？・・・ついでにネコアルク」

「そうデスよ？確か今日はお休みのはずデース。・・・ついでにネコアルクはどうでもいいデスけど」

おおう・・・なんとというアウエイ感。アチシの方ではなく、後ろにいるセレナちゃんに視線が往くにや。

・・・べ、別に寂しいって訳じゃにやいんだからね！

(安心しろ、そんな事しても別に萌えないからな。それが一番相応しいのはクリスが一番似合うから。byクロトダン)

「ん？」

「どうしたの、クリスちゃん？」

「いや、なんか失礼な事を言われた気がしたような・・・気のせいかな？」  
「にやんかクリスちゃんかにやにか受信したようにやけど、とりあえず今は目的を果たす！(ΦωΦ)??キュピーンッ」

「あの・・・その・・・」

「セレナ？」

お？ちようどマリアさんがセレナちゃんに近づいてきたにや。・・・ここにや！(ΦωΦ) カッ

マリアさんがセレナちゃんの目の前に立ったのを確認したアチシは、キャッツサイレントウオークで瞬時に二人の死角に入り、セレナちゃんが纏っている布を掴み思いつき引き張ったにや！

ーガッ！ー

「トオオオニヤアアアアッ!!」

ーブワッサー！ー

「・・・へ？」―突然布が無くなった事に一瞬混乱する―

「な・・・ッ!？」―妹が纏っていた布が無くなって一瞬驚いたが、改めて妹の姿を視認すると思考が停止した―

さあ！ゆけ、セレナちゃん！そのままマリアさんを押し倒ーズンツ  
！―すまぶらっ!?

「セレナに何してるの（デス）!!」

・ ・ ・

### セレナ視点

私が今生きていられるのはネコアルクさんがあの時、燃え盛る研究所から助けてくれたからだと思ってる。

最初にネコアルクさんに出会った時は、変な生き物が死にかけた私を迎えに来たのかと死にかけた私はそう思いました。

・ ・ ・

### 7年前

あの時、自律型完全聖遺物であるネフィリムの起動実験中にネフィリムが暴走してしまい。私は姉さんとママ、調さんと切歌さんの命を守ろうとアガートラムを纏い、ネフィリムを起動前の状態に戻す為に絶唱を唄った。

ネフィリムが起動前に戻ったのを確認した私は顔から血を流した

まま姉さん達がいる後ろを振り返った後、そのまま地面に倒れ天井が崩れ落ちてきた瓦礫に押し潰されて私は死んだ筈だった……。

『……っ、生きてる?』

瓦礫に押し潰されて死んだと筈なのに痛みを感じた私は、状況を確認しようと思いをゆつくりと開けてみたら……

『お嬢ちゃん、こんにゃとところで血だらけでにゃーにしてるにゃ?』  
(ΦωΦ) ニュツ

『キヤアアアアアアアアツ!?』

ーバシンツッー

『あぼろんっ!?』

視界いっぱい広がるネコアルクさんに驚いた私は痛みを忘れて力強く平手打ちをしました。

『イチチチチ……。もう、心配して聞いてあげにゃのにいきなり平手打ちを噛ますにゃんて酷い娘にゃ!』

『あ、ごめんなさい。突然出てきたから驚いて……。アグツ!?』

叩かれた頬を擦りながら私の方に近づいてきたネコアルクさんに謝罪をしていたら、絶唱の影響で動けない身体を無理矢理動かしたせいで全身に痛みが走り、蹲ってしまいました。

『にゃにゃっ?ちよいちよ大丈夫かお嬢ちゃん?よく見たらニヤバイ感じではありませんか?にゃにかあったのかにゃ?』

……。今思うと本当にネコアルクさんのしゃべり方を聞くと死にかけている緊張感がなくなっていくと思うな。

『うう……。はい、少し前にこの上で暴走したネフィリムを止めようと絶唱を唄い、ネフィリムが起動前に戻ったのを視てから……。姉さん達が無事の姿を確認した後崩れ落ちてきた瓦礫に押し潰されて死んだと思ったのですけど……。ここで喋っているのが今も不思議です』  
『ふーむ、にやるほどねー』

私の話を聞いたネコアルクさんは右手を顎に当てて考えこむ仕草

をする。この時のネコアルクさんの仕草を見た私は死にかけているのに可愛いと内心思いました。

『まー、瀕死の状態でまだ喋っていられるのは知らんけど、アチシが穴を掘続けたおかげで今ここにお嬢ちゃんが瓦礫に押し潰されずにすんだ理由はわかったにや』

『え?』

今なんて言いましたこの人? いや、ネコ?

私はうんうんと首を上下に動かしているネコアルクさんにどうして穴を掘っていたのか聞いてみました。

『え?にやんでアチシが穴を掘っていたって? いやー実はネー、この国の領域に飛んで入ってきたらこの国の戦闘機が現れていきなり機関銃やらミサイルとか撃ちまくられて落とされてサー、落ちた後にやんかデカイ建物が見えて道を聞こうと近づいたら、新種の生き物だーって叫びながら捕まえてきたから咄嗟にキヤツツドリルアツパー頭突きで地面を掘ってね、しばらく掘続けたらお嬢ちゃんが落ちてきたのよ』(ΦωΦ) / キイテキイテ

『そ、そうなんですか・・・えーと、とりあえずありがとうございます?』

話を聞いた当時の私は色々突っ込み所がありましたけど、落ちてきた瓦礫の重みで私は押し潰されずにすんだのはこの人?のおかげだと解った私はネコアルクさんにお礼を言いました。

『にやーに良いってことよ』(〃^ω^〃) ムフー

(可愛い・・・)

どや顔で胸を張るネコアルクさんを見て思わず抱きしめたくなくなりました。

『コフツ!』

『にやー!ちよいちよいお嬢ちゃん、いきなり血を吐いて大丈夫にや? どこか悪いのかにや? 見たところひどい外傷は見当たらないけど?』

ネコアルクさんがそう言いながら横になってる私の身体を触りながら傷の具合を調べてくれました。

『うーむ、こうにやったら・・・キヤッツエックスサーチアイ!』(??  
ω??)ペカーツ

『キヤッツ!』

私の身体を一通り調べた後、ネコアルクさんが眼から緑色の光を放ってきて私の身体を頭から足まで光に包まれました。

『むむーにゃんじゃこれは?身体の中が内臓含め血管は切れかけて、筋肉繊維までもボロボロにやないか。今生きているのが不思議なくらいにや。一体どうやったらこうなるのにや?』(ΦωΦ)?

光を消した後、ネコアルクさんが私の身体の状態を言った事に驚きました。絶唱の影響で自分の身体が傷ついていると解っていましたけど、先ほど放ってきた光は私の身体の状態を調べる為の行為だったと気付きました。

『ま、とりあえずお嬢ちゃんの身体を治すにや』

『治すって・・・どうやって・・・ですか?ここには・・・医療器具はありませんよ?』

私はネコアルクさんに質問しましたが、段々呼吸が難しくなってきた喋るのが困難になって途切れ途切れで質問しました。

『今はお嬢ちゃんの傷を癒すのが先にやからその質問は後でにや。・・・いくぞ!ハアアアアア・・・ツ!!』

∩(ΦΔΦ)∩ゴゴゴゴッ!

ネコアルクさんが両手を腰だめにして声を出すと、ネコアルクさんの身体から何かオーラ?みたいなのが立ち上ってきました。

『あの、治すんですよね?とどめを刺すわけではないですよ?そうですね!』

『ハアアアアア・・・チャージ完了!逝くぞお嬢ちゃん!』

『字が違いますか!?あつ、ちよつと待って・・・』

ネコアルクさんを止めようと手を伸ばそうとしましたが、既にネコアルクさんが前に出した両手の間から緑色の光が溜めが終わりまりました。

『流派!真祖不敗が最終奥義(意味不明)キヤッツ・・・リカバリイイイイイ、オオオオオオオラアアアアアアアツ!!』(∩Φω

Φ( ) ⊂ ∥ ∥ ∥ ○ズビーッ!

『キヤアアアアアアアアッ!』

ネコアルクさんが両手を突きだして光を私に向けて放ってきて、私は悲鳴を挙げながら眼を瞑りました。

『・・・あれ?痛みが?それに傷も?』

しばらく経ってから、なんともないことに気付いてしかもさっきまで身体に襲っていた痛みと傷がなくなっていることに驚いて声を出しました。

『よしよし、全快とは言えにやいがこれで一安心にや』(—ω—)ウンウン

その言葉を聞いた私はゆっくりと立ち上がってから、自分の身体を見て傷と痛みが本当に消えていて驚きました。

『あの、ありがとうございます。あなた?のおかげ助かりました』

『にやーに、良いってことよ。そんじゃマー、お嬢ちゃんを上に戻してやるとするかにや』

お礼を聞いたネコアルクさんは右手で後頭部をかいした後、顔を上に向けてそんな事を言いました。

『え?あの、気持ちは嬉しいですけど・・・上は瓦礫で塞がっていて、戻るの難しいと思いますよ?』

そう言った私はこの人?に声をかけると、ネコアルクさんはケラケラと可愛く笑いながら大丈夫にやと私から離れた場所に立ちました。

『さて・・・ンアー』

(Φ□Φ) ↓ (Φ□∥●Φ) ニューツ (口から大砲の砲門が出てきた)『・・・』

口から大砲の砲門が出てきました。

待ってください、その身体のどこから出したんですかそれ?質量の法則に喧嘩売ってませんか?いや、それ以前にどうして口から大砲が出てくるんですか?

ああもう、回想なのに突っ込みが追い付きません!

『必殺!キヤッツ天元突破キヤノンツ!!』

ーズドンツー!

ネコアルクから放たれた砲弾が天井を塞いでる瓦礫に向かって飛んでからしばらくしてそして……

ードカアアアンツ！ー  
着弾。

砕かれた瓦礫が地面に落ちてきて周りを土煙に包まれました。

『うむ、これでよし。しかもいい具合に上に登れそうに壁が崩れたにや。これにやら無理せず登れるにや』

『……』

この時、ネコアルクさんが生み出してきた非常識な行動に私は考えるのを辞めました。

『セ……ナ……！』

『！この声って……！』

思考を止めていると、上から聞き覚えがある声が聞こえて顔を上に向けました。

『セレナー！大丈夫なの!?生きているなら返事をしてー！』

上を見ると MARIA 姉さんが顔を出して土煙のせいでこちらの姿が見えないのか、大声を挙げながら私の名前を呼んでいる姿を確認できた。

『セレナー！無事なら返事してデース！』

『セレナ、怪我はしてない!?大丈夫なの!?』

MARIA 姉さんだけではなく、切歌さんと調さんも顔を出して私の名前を呼んでいることに気付きました。

『姉さん……切歌さん……調さん……。良かった、みんな無事で……ッ！』

みんなの声を聞いて無事だとわかった私は嬉しくて涙が流れまし

た。

『お嬢ちゃんのお迎えがきたことにやし、アチシはそろそろおいとまするにや』(ΦωΦ)ゝソイジャツ

『待ってください！あなたの名前は！どうして私を助けてくれたのですか！』

慌ててこの場から去ろうとするネコアルクさんに声をかけてどうして私を助けたのか質問しました。

『フ、アチシは名乗る者ではにやいただのネコにや。目の前に助けられる命があるにやら助ける。それがアチシのモットーにや。いつかまた会えたらその時はお茶でもしようにやお嬢ちゃん。またにや』

そう言ってネコアルクさんは穴の奥に進んでいってこの場から去って行きました。

・  
・  
・

まあ、フロンティア事変に敵として再会した時は驚いたけどね。・・・姉さんの服を破って胸を露出させて、翼さんに斬られてモザイクになっていて更に驚いたのは内緒。

・・・フロンティアでアガートラムを飲み込んで二つに増やしたの  
はもつと驚いたけど・・・

それより・・・

「ウフフ・・・セレナが・・・セレナが可愛い犬耳娘になって・・・」  
ドクドク

「マリア姉さん！しっかりして！」

「マリアさん、眼を開けてください！」

「おい！この出血量は流石にヤベーぞ！?おい、マリア！こんなアホな  
事で死んだら一生の笑い者だぞ!？」



「これで死ぬるなら・・・むしろ本望・・・っ！」  
「いや、駄目だろ（でしょ）（ですよ）っ!?!」

ネコアルクさんに着せられた「なりきれ！モードビースト！（ワン娘ver）」という手足と身体に必要な部分だけを隠したモフモフが付いた水着を纏った私の姿を見たマリア姉さんが一瞬固まった後、凄い勢いで鼻血をだしながら後ろに倒れたのを見て慌てて響さんとクリスさんと一緒に姉さんの介抱をしました。

「どうしてあなたは！人が辱しめるイタズラばかりするの！」

「このーこのー！デース！」

「あ！ちよ！お二人さん!?これには深い訳が・・・ギニャアアアアアアアアッ!?!」

そしてイタズラの張本人のネコアルクさんは調さんと切歌さんに何度も踏みつけられていました。

ー目の前に助けられる命があるにやら助ける。それがアチシのモットーにやー

あの時、私と会ったのは偶然で、たまたまその対象が私だとしても・・・あなたが私を助けてくれたのは本当に感謝しているんですよ？

それにね・・・

イタズラばかりするのがたまに傷だけど・・・私、あなたの事が大好きですよネコアルクさん。

終わり

デスっ娘とジューっ娘の二人は仲がいいにや

ドーム、ドーム、ネコアルクでございまーす。

さて、アチシはS・O・N・Gの休憩室にいるのだけど・・・今アチシが何処に隠れてるか解るかにや？

第一回、ネコアルクを探せ！

1. 観葉植物の鉢植えの中。
2. 休憩室に設置してある自販機の中。
3. ベンチの下。
4. ゴミ箱の中。
5. 自販機の隣に置いてある段ボールの中。
6. 何故か置いてある等身大ネコアルク像（ドヤ顔でピースしてる）

フ、フ、フ、さーて解るかにや？

ーザッー

おや？目の前に人の気配が？

「そこお（デース）っ!!」

ードゴオツ!!ー

「するぼろっつ?」

ードツ!ー

ーガツ!ー

ーズザーツ!ー

突然、ギアを纏ったきりしらコンビが繰り出したダブルキックである場所に隠れていたアチシごと蹴り飛ばしアチシは休憩室から通路まで転がったにや。

「な、何故・・・アチシが、そこに隠れていると・・・？」

蹴り飛ばされた衝撃でぼろ雑巾のようになったアチシは口から血を流しながら蹴り飛ばしたお二人に何故居場所が解ったのか質問したにや。

「何故って本気で言ってるの？」

「あんなの私でもまるわかりデース！」

なんと!? 調ちゃんならともかく、あの天然という言葉が似合うデスっ娘の切歌ちゃんにすらわかるとは・・・っ!?

「失礼デスね！大体・・・」

一度言葉を切った切歌ちゃんがビシイツ！とアチシが隠れていた物に指を突き付けて続きを話したにや

「あんな気持ち悪い自販機が何処にあるのデスカ！」

そこにはアチシが入っていたアチシの顔を模した自販機が無惨に蹴り壊された姿だったにや。

正解は2。休憩室にある自販機の中でした〜♪

読者のみんなにやは解ったかにや？

「解るか（デス）!!」

「しどい！あんなに苦労して作った力作にやのに！」

「あんな作品はこの世から無くすべき」

Σ（ΦωΦ）ガーンッ！

「今度という今度は許さない」

「いい加減に懲りるのデス！」

そう言いながら二人はアームドギアを展開してアチシに突き付けて同時に叫んだにや。

「マリアとセレナに変な格好をさせない（デース）！」

「ゴメンニヤサーイ!! 似合うと思つてついいいいいい!!」

実はこうなつた理由は前回の歌姫鼻血死コスプレ事件（死んでない）の後、次はマリアさんもコスプレさせて姉妹揃つてモンスターコスプレ（マリアさんは悪魔系でセレナちゃんは雪ん娘のコスプレで）をさせようと、両手に衣装が入つた紙袋を持つて二人の元に行こうとした途中できりしらコンビに鉢合わせして・・・今に至るにや。

あ、ちよ、お二人さん待っ・・・

・  
・  
・

### 切歌視点

全く！ネコアルクは大馬鹿デス！

セレナにあんな格好をさせただけじゃなくマリアまで手に掛けようとして、許さないデス！

初めてネコアルクと会つたときもマリアの服を破いて辱しめていたし、かわいい見た目とは違つてスケベな奴デス！

それにまだF・I・Sの時もアタシ達の前に出てきて、戦闘中なのにマリアだけじゃなく、アタシと調にもイタズラしてきて大変だつたデス！

でも・・・

もし、ネコアルクがあの人を生かしていなかったらフロンティアで調の命がなくなつていたかも知れなかつたデスね・・・

・  
・  
・

あの時、まだアタシ達がF・I・Sとして響さん達と敵対してた

頃、調と一緒に食糧が足りなくなつて買い物をした帰りだったデス。

あの時は調の体調が悪くて人目を避けて、人がいない建設途中の工事現場に入つて休んでいた時デシタ。

「調、本当に大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ、切ちゃん少し疲れただけだから」

この時は戦闘の疲労で体調が崩れたと思つていたのデスが、本当は別の理由のせいで調の体調が悪くなつていたのデス。

ワタシは調を横にして体調が良くなるまでしばらく見守つてましたが、アタシ達の上に吊るされてあつた鉄骨を固定してた紐がほどけてワタシ達に向かつて落ちてきたのデス。

当時ギアを持っていなかったアタシは横になつてる調を庇おうと調に覆い被さつて目を瞑つたのデスが・・・

「え・・・？なんデスカ・・・これ？」

咄嗟に突きだした手から光の壁が現れて鉄骨を受け止めていて驚きました。

後になつてあの力がフィーネの力だと気付いてアタシの魂が塗り潰されて調の事を忘れてしまうとショックを受けてしまったデス。

『切ちゃんが、切ちゃんदैられる内につてどういふこと？』

それから少し経つてフロンティアで調と対峙してアタシの中のフィーネの魂が覚醒しそふになつてゐる事を調に説明したデス。

でも、調は馬鹿な事をしようとしたワタシを止めて見せると言つたのデス。

『これ以上、塗り潰されなふように・・・大好きな切ちゃんを守る為にな・・・』

『っ！大好きとか言ふな！アタシのほうがつつと調が大好きデス！だから・・・』

だからアタシは大好きな人達がある世界を守りたくて調の言葉を受け入れなかつたデス。

『切ちゃん・・・』

【緊急Φ式双月カルマ】

『調……』

【封・P I N O 奇お】

『『大好きだつてえええ……言ってるでしょおおおっ!!』』

そう叫びながらアタシと調は互いの得物をぶつけあつたのデス……

そしてお互いの得物をぶつけながら言葉を交わしていたのデスが、アタシが放ったイガリマの刃が調の身体に突き刺さろうとした瞬間、光の壁が展開してイガリマの刃を止めました。

『なに……これ……?』

この時ようやくアタシはファイネの魂が宿っていたのはアタシではなく調の方だった事に気付きました。

『アタシ……本当に嫌な娘だね……』

そしてアタシは自分のしてきた事が調を悲しませてしまった罪悪感に耐えきれずアームドギアの鎌を投げて自分の命を絶とうと目を瞑って調にさよならを言ったら……

『切ちゃん!!』

『っ!調?!』

前に出た調がアームドギアの刃からアタシを庇おうとしたのを見たアタシは調を止めようと手を伸ばしたけど、後少してアームドギアの刃が調の背中に突き刺さろうとした……その時。

『ふん、覚えのある力を感じて来てみれば、私の魂の欠片を宿した器が自殺願望者を庇って傷つく寸前とはな。全く……それを守った私も甘くなったものだな』

女の人の声が聞こえた直後、アタシ達の身体ごと包み込むように光の壁が現れてアタシが放ったアームドギアが弾かれて地面に突き刺さりマシタ。

『これって・・・?』

『調がやった訳じゃなく・・・もしかして!?!』

その光景をみたアタシと調は声がした方向に顔を向けるとそこにいた人影を見て驚きの声をあげたのデス。

『フィー・・・ネ?』

『えつと・・・本物?』

『・・・言っておくが』プルプル

アタシ達の声を聞いた女の人ーフィーネーが身体を震わせて大きな声を出しマシタ。

『私が好きでこの姿になったのではなく!あのアホネコのせいでこうなったのよ!くつ、本当に忌々しいいいいいいっ!!』

そう叫びながらフィーネはこの場にはいないネコアルクに向けて悪態をついたデス。

『・・・』

『お前達!』ギロツ!

『はいっ!』

『いいか?私がこの姿で生きていることは誰にも言うな。もし言ったら・・・わかってるわね?』

この時のフィーネの笑顔は笑っていたけど目の奥が笑ってなくて怖かったデス。ああ、思い出したら震えが・・・ガクブル

・  
・  
・

あ、勿論、戦いが終わった後、フィーネのおかげで調の中にあつたフィーネの魂（フィーネが言うには欠片）を取り除いてくれて調はフィーネにならずにすんだのデス！

あの時、もしネコアルクがフィーネを助けなかったら、あの場にフィーネが現れずに調はあの時に死んでしまっていたかも知れなかったデスね……

まあ……間接的にいえばネコアルクのおかげとも言えるのデス……

でも……もしかしてそれを全部予想してフィーネを生かしたのデスか？ネコアルク？

「つ、次こそは……カデンツアヴナ姉妹だけじゃなく……装者全員の……コスプレ姿をさせ、てみせる、にやあ……」

……やっぱり気のせいデスね。

調と顔を合わせたアタシは、往生際の悪いネコアルクに向けて仲良く踏みつけマシタ。

「えい！」

ーズンツ！ー

「ブニャアッ!？」

ーガクツー

ザマーミロデス！

終わり



私が、ネコで、あるものかあああああつ!!

どうも皆様のネコアルクでございます。

今アチシは弦ちゃんの家と一緒にアクション映画を観て、その後一緒に特訓して弦ちゃんとは別れたその帰りにや。

それにしてもあまり来たことない道だから迷ってしまうにやあ。

さーてと、早く帰って未来ちゃんが作ったご飯が待ってるにや急がないーガッーとばらあつ!?

ーズザー!ー

「イチチ・・・誰にや!人が歩いてるところに足をかけた奴は!?!表でろおい!」(逆ギレ)

顔を押しえた後アチシは、怒りながらアチシの足を引っかけて転ばせた犯人に向けて声をかけたにや。

「・・・ふん、私以上の化け物のくせにこの程度に気づかないで呑気なものだな?」

アチシの声に答えたのか、道路の脇から女の人が出てきながらアチシに声をかけてきたにや。

「お、お前は・・・!?!」

現れた女の姿を見たアチシは驚きの声をあげて指を突きつけ、それを見た女はニヤリと口の端を上げてアチシの言葉を待ったにや。

「・・・誰でしたっけ?」

おお、見事なコケっぷり。なかなかいいセンスを持つてるにや。「持つてるにや、じゃない!フィーネだ!私をこんな姿にした張本人

のくせに!なにしれつと忘れているんだ!!」

フィーネ?フィーネ・・・フィーネ・・・あ!

思い出したにや。確か、る、る、ルナアタックだっけ?の事件の黒幕だった女にや!その黒幕の名前は!

「ストーカーの巫女フィーネ!」

「だれがストーカーだ!先史文明の巫女だ!どんな言い間違いをすればそうなるんだっ!いい加減にしろ貴様っ!!」

おお、見事なツツコミ。今度一緒にお笑いの道に行ってみる?

「だって〜あの時と違って全然姿が変わっているにやもん。忘れてしまうのも仕方によいにや」

そう、彼女の姿は当時の人間の美女の姿ではなく・・・

アチシとそっくりな姿をした長髪の濃い金髪で目の色が碧で白衣を着た、もう一人のアチシが腕を組んでこちらを睨んでいるにや。

(イメージするなら2Pカラーのアチシをイメージするにや)

ーガッー

「だから、貴様が私をこんな姿にしたんだって言っているんだろうがあああああああつ!!」ギリギリギリッ!

ギブギブギブッ!待って待って!これ以上はアチシの首が折れちゃううううううっ!?

・  
・  
・

フイーネ視点

ふん、忌々しい化け猫が!

私が月を落とそうとした時も何度も邪魔をして、こんな・・・こんなふざけた姿に変えやがってえええええっ!

・  
・  
・

私が起こした、後にルナアタック事変と呼ばれた事件。

ネフシュタンの鎧の再生能力とソロモンの杖によるノイズを操る力、そしてデュランダルのエネルギーを利用して私自身を触媒にノイズ共と一つになった紅い龍となり、XDモードになったシンフォギア装者達を葬ろうとしたが、私から奪い取りデュランダルの手に持った

立花響達が放った攻撃により完全聖遺物同士の対消滅によりネフシユタンの再生ができず爆発に巻き込まれ、そして私を爆発から連れ出した立花響の手によってこの世から消滅した・・・筈だった。

(・・・ここは？私はあの時、あの娘の手によって消滅した筈なのに何故生きている？)

そう、消滅した筈の私があがつけばどこかの洞窟内で何かの液体に満たされた容器の中で意識が浮かび上がり状況を把握する為に周りを見渡していると。

『あ、やっと目覚めたんだ？良かったー、初めてやってみたからちよつと不安だったんだよねーアハハハッ！』

(！その声は・・・あの時私を邪魔をした女か！)

そう、心が折れた立花響にとどめを刺そうネフシユタンの鞭を振り下ろした瞬間、突然何処からか現れた女が私が振り下ろした鞭を掴み取り私の身体ごと立花響から離れた場所まで投げ飛ばした女の声が洞窟内に響き渡った。

私は声が聞こえた方に視線を動かしてみると、洞窟の壁際に背中を預けて腕を組んだ状態でこちらを見ている女の姿が確認できた。

『ゴメイトーウー！よくわかったわね？消滅したと思っただら生きているって今どんな感じ？』

(ふん！あの時、私を虫を払うかのようにあしらった女にそんな事を聞かれたら最悪としか思えんな)

『ふーん？ま、そうだよ。いつもの私ならともかく、今の私だったらそう言うかもねー』

私が返した言葉を気にせず、女は興味なさげに返事を返した。女の顔を見ようとしたが、奴の胸元から上が影が入っていて奴の表情を見ることが出来ずに内心舌打ちをした。

『あ、そうそう。何で声が出てないのに会話が出来ているのは、私の能力の一つで貴女の思考を読んでいるからよ。一応言っておくけどそ

の中で喋っても溺れないから大丈夫よ?』

その言葉を聞いた私はゆっくりと液体の中で息を吸ってみると、確かに女の言う通り溺れることはないと解り早速声を出した。

『・・・なるほど、どんなカラクリかは知らないが私と同等か、それ以上の上を持つてるようだな?』

『ほっほーう、流石は先史文明期の巫女。あの短いやり取りでその液体が何か解ったんだ?』

『といっても半分程だが、自然治癒を促す生体ナノマシンに私の身体の中に流れる魔力。そして、この身体から繋がる貴様の力・・・。貴様、吸血鬼だな?それもとてつもなく上位の力・・・違うか?』

『・・・』

私の言葉を聞いた女が黙りこんだのを感じて、やはりかと小さく呟いた。

しかし吸血鬼が未だに残っていたとはな?先史文明期でもその数は激減していたが、生き残りがまだいたとは驚きだな?

『・・・はあ、そうよ。貴女の言う通り私は吸血鬼よ』

『ほう、否定はしないんだな?』

『私との繋がりでもう解っているんでしょ?こうなることは貴女をその身体にするときに解っていたわ』

この身体・・・そう言われて自身の手を見ようとすると、身体を鎖で固定されていて身体が動かないことに気づいた私はどういう事だと考えているとそれに答えるかのように女の声が聞こえてきた。

『あ、言い忘れてたけど、今貴女の魂がその身体に定着するまでは、身体は動かさないから』

『なに?』

『だって魂を違う肉体に宿すのはとても難しくって危険な事なのよ?いくら規格外の私でも真似事するのは難しいし、定着が不完全の時に身体を動かすと魂が肉体に定着できずに魂が霧散してしまうもの。それをホイホイと転生するのってどんな術式を組んだらそうなのよ貴女。・・・だから完全に定着するまではしばらくは私が作った鎖で固定してるの。魂がその身体に固定されたら解除してあげるからそ

れまでは大人しくしてね?』

その言葉を聞いて舌打ちをした後、女に何故私を肉体を与えてまで助けたと質問した。

『ん〜?なんとなく?』

『はっ。』

『というか、私の友達を悲しませた責任を取って貰おうと能力をチョイと使って貴女の魂を集めてその身体にぶちこんだのよ。．．．まあ、一部の欠片は回収し損ねたけど』ボソツ

『聞こえてるぞ』

ふざけた女だ転生する前の私の魂を集めるとは、そんな事私できえ出来ない芸当だぞ。

それに友達だと? クリスは日本にきた後、私の下に着かせたが、天羽奏と風鳴翼の交友関係にあの女はいなかった。

なら、立花響か?

だが、あの娘の周りにあの女の姿は見えなかった。もっとも近くにいたのは小日向未来とあのナマモノのネコアルクしか．．．っ!

『貴様、まさか!』

『あ、そろそろ時間だ』

ーポンツー

と軽い音と一緒に白い煙が女の全身を包みこみ、しばらく煙が晴れるのを待っている．．．

『アアー、やっぱりこの姿になると疲れるにやー。オリジナルに比べれば劣化してるけど、その分能力で補えるから便利にやんだだけにやー』(ーωー)

『やはり貴様か!ネコアルク!!』

思った通り、あの吸血鬼の女の正体はネコアルクだった。

『正解ー。まあ、あの姿になるとちよつとマジモードににやるからあまりなりたくないけどねー』(ーωー)

腑抜けた顔をして私の言葉に答えるあのネコモドキの顔を殴りた

くなつて歯を噛み締める。

く・・・ふざけた存在だと思つたら、常識すらも無視するのかこのナマモノは・・・ッ！

『答えろ、貴様がさっきまで変わっていたあの姿はなんだ？それに・・・本当に吸血鬼なのか？』

目を細めてネコアルクに質問する。先ほどの変身といい、致命傷を受けても何事もなかったかのように起きあがってくる。私知知っている吸血鬼にはではあり得ない事だ。

『ん、何者つて言われても、アチシはアチシだし。あの姿は無理やりリミッターを外したから一時間も維持するのもキツいんにやよね』  
『そんな事を聞いてるんじゃない！私が知っている吸血鬼とは違う力はあるんだと聞いている！後、平べったくなつて気が抜けるようなしやべり方をするな！そのまま飛ぶな！』

数分後

『んもー騒がしい人にやね』（ΦωΦ）フー

『騒がしくしてるのは貴様だろ・・・』ゼーゼー

しばらくしてようやくナマモノが話を聞く姿勢を取ってくれた。長かった・・・分裂するわ、丸くなるわ、合唱曲を歌うわ、組体操をするわ、ゲームをするわ、料理を作るわ、元に戻るわ何を考えているんだこいつは・・・？

駄目だ、まともに相手取ると頭が痛くなる。

『・・・頭痛薬、いりますか？』（ΦωΦ）／ホイ

誰のせいだ！誰の！！

『まー詳しくはいえにやいけどー、アチシのあの姿はアチシのオリジナルの姿としか言えにやいにや』

『オリジナル？それはどういう』あ、そろそろ定着が完了するにや』なに？』

その言葉の通りに満たされた液体がゆっくりと下に流れていき、私を拘束していた鎖が容器ごと幻のように消えていった。

『どうてすかにや？新しい身体は？』

『ふん、前の器よりは具合がいい・・・だが、貴様が私にしたお礼を返さなくて・・・は・・・なあ!』

目を瞑って定着した身体の具合を確認した後、背後に立つネコアルクに先ほどまでやってくれた礼を返してやろうと振り向いたら、あり得ない光景が目に入った。

『な、な、なあっ!』

『なんでやねん?』

『違う！何故私の視界が貴様と同じ高さまで低くなっているんだ!?これはどういう事だ!』

『??ああ、そういうこと?』(ΦωΦ)ポンツ

私の言葉を聞いてようやく理解したナマモノが出した言葉を聞いた私はあまりの衝撃に空いた口が塞がらなかった。

『イヤーあんたが自分の遺伝子を持った人間に転生するって聞いてあの戦いの中で流れた血とか髪の毛を頂戴して、響ちゃん達が月の落下を阻止しに行った後、山奥にあつたこの洞窟でアチシの分体を作つてから頂戴した血と髪の毛をぶちこんでから霧散した魂を必死こいて集めたという奴にや』

『.....』

・・・待て、こいつは今何を言った？

自分の分体に私の遺伝子を取り込ませた・・・？

・・・待て、待て待て待て待て待て!!

こいつの言葉が本当だとしたら、今の私の身体は・・・!?

『はい、鏡』○?／(ΦωΦ)サツ

ナマモノが取り出してきた大きな鏡を私の前に置いて、私は恐る恐る違う事を祈りながら鏡の前に立ち自分の姿を確認した。

・・・予感、的中した。

『わ、私が・・・』プルプル

私の姿は髪の毛の長さや瞳の色が面影を残してる以外、姿形、服装までもが完全に隣に立って私の肩に手を置いてムカつく笑顔を向けてくるナマモノと同じ姿・・・ネコアルクそのものになっていた。

『私が、ネコで、あるものかあああああつ!!』

・  
・  
・

ああ、本当に忌々しい!!

その後はあのナマモノに匿われながら他の奴等に私がフィーネだと気づかれないように注意した。

時にはネコアルクがいない時は代理としてあいつの振りを演じて、私の精神がガリガリ削られていくのを感じた・・・

「ああ、何故こんなことに・・・。あいつに関わったからか？それとも立花響を拐おうとしたからか？」

本当、訳が解らない・・・!

ーギロツ！ー

頭を抱えた後、まだダメージが抜けず倒れたままのナマモノに睨み付けた。

「そもそも貴様が私をこの身体に入れなければこんな惨めな事にならなかったものをオオオオツ!!」

ーゲシツ！ゲシツ！ー

そう叫びながら、倒れたままのナマモノに足を振り下ろし更に追い討ちをかけていると・・・

「おーい、ネコ君。俺の部屋に鍵が落ちてあつたぞ？気づいたから良かったものの、もしそのまま帰ったら困るのはそっちの・・・」

いつもなら気配を察知して隠れたりする私だが、この時は倒れたナマモノを踏みつけるのに夢中になっていて曲がり角から人がくるのに気付くのが遅れてしまった。

「りよ、了子・・・？」



「な!?!弦十郎!?!」

「生きていたのか・・・?いや、それよりその姿は一体?」

「あ、あ、ああ・・・」フルフル

ークルツー

「イヤアアアアアアアアアツ!!」

ーダツ!ー

「はっ!ま、待ってくれました子君!」

誰にも気づかれないうに過ごしていたのに、このナマモノのせいでもっとも見られたくない人物に会ってしまった。私は頭を左右に振って、耐えきれなくなつてこの姿になつてから初めて出した速度でこの場から逃げた。

終わり

大切な人を護る為なら……（注：流血、残酷な表現あり）

——い。

あの娘を傷つけられた事を。

——ない。

なんの罪もないあの娘の笑顔を曇らせたことを。

——せない。

ただ生き残っただけなのに悪意をぶつけた奴らを。

——許せない。

あの娘の日常を壊した奴らを。

でも、一番許せないのは……

傷ついてしまったあの娘を助けるのが遅かった私自身を——

——ワタシは絶対に許せない——

・  
・  
・

ネコアルク視点。

三年前。

響ちゃんがあのライブから戻ってきて。パパさんが家族を置いて逃げ出してから数週間が過ぎたある日。

『にや？響ちゃんがまだ帰ってない？』

アチシがバイト先から帰ったら、ママさんから響ちゃんが学校から帰ってないと聞いて首を傾げて疑問の声を挙げる。

『ええ、それに未来ちゃんの家連絡してみたら未来ちゃんも帰ってないの。ネコアルク、帰ったばかりで悪いけど捜しに行ってもらえる？』

なんと響ちゃんだけでなく未来ちゃんもお家に帰ってないとな？

『了解にや。アチシも知り合いに一緒に捜してもらえるか頼んでみるにや』

『お願いねネコアルク』

『アイアイニヤ』

そう言つて家を出たアチシは嫌な予感を感じながら、携帯を取り出して知り合いに電話をかけた後、響ちゃんと未来ちゃんの匂いを頼りに捜しに行ったにや。

・  
・  
・

『ここにや？』

響ちゃんと未来ちゃんの匂いを頼りに着いた場所は、街から離れた廃工場に辿り着いたにや。

『スンスン、確かに二人の匂いがするにや。それに』

二人の他に複数の人間の匂いと…

—微かな血の匂い—

嫌な予感を抱えながら、キャッツサイレントウォークを使って廃工場の入り口に近づいて少しだけ開いている隙間から扉の中を覗いてみると：

頭から血を流して倒れている響ちゃんと泣きながら響ちゃんの身体を揺すっている未来ちゃんの姿が見えたにや。

それを見たアチシは一瞬頭が真っ白になり、彼女の頭から流れ続ける血を見たその直後、私の思考が朱く染まった。

・  
・  
・

三人称視点。

血を流して倒れている立花響の姿を見下ろしている複数の者達。

彼等はあるのライブの日に亡くなった犠牲者達に関わる者達である。

彼等は自分の大切な人が亡くなったのにたった一人で生き残った響に怒りや恨み、憎しみを抱き。その感情を響にぶつけ生き残ったことを後悔させようと暴徒と化し、同じように響に恨みを持つ彼女のクラスメイトが学校から帰る彼女と小日向未来を拐えるよう手引きし、使われなくなった廃工場に連れ込んだ。

その後は殴る蹴る等の暴行や冷水や熱湯を彼女に浴びせ、抵抗や声を挙げたら一緒に拐った未来にも同じ目に合わせると脅しをかけて、彼女の行動を封じる。

それを聞いた響は身体中が痣だらけになっても何も言わず唇を噛み悲鳴も挙げるのを我慢して彼立花響はただ無抵抗に彼等の暴力を受け続けた。

そして、一人の男が振り下ろした鉄パイプが響の頭に当たり響は頭から血を流しながら地面に倒れ気を失い、その光景を見た未来は悲鳴を挙げて彼女に駆け寄り名前を叫びながら何度も彼女の身体を揺すり続ける。

それを見た男は下らないと唾を地面に吐き、名前を呼び続ける未来を黙らせようと鉄パイプを振り上げようとした瞬間。

ガーンツという音を響かせながら、廃工場の入り口を塞ぐ鉄の扉が吹き飛んだ。

それを聞いた響と未来を囲った暴徒達はなんだと思い警戒しながら入り口の方に振り向いてみると……

——そこには、ナニカがいた。

それはいつも立花響達と一緒にいる猫みたいな生物ーネコアルクーがそこに立っていた。

男達はネコアルクとわかった途端、なんだお前か。と警戒を解いた暴徒達から一人の男がネコアルクに近付いて、ついでに軽く痛めつけてどこかの研究所に売ってしまおうと考えてネコアルクに右手を伸ばそうとしたら……

——屑が、邪魔をするな——

ネコアルクから聞いたことのない声が聞こえた直後、右手を伸ばした男の肘から先が消し飛んだ。

『——え？あ、があああああつ!!腕が!?俺の腕が!?!』

少し遅れてようやく自身の腕がなくなっていることに気付いた男は残った左手で右肘を押さえ悲鳴を挙げながら地面を転がる。

それを見た暴徒達は何が起きたのか解らずただ無様に転がり続け

る男の姿を見ることしか出来なかった。

その光景を目の当たりした未来は響を揺する手を止め先ほど起きた出来事に信じられないと思いつながらネコアルクの姿をじっと見続けた。

なぜ男の腕がなくなったのか？

その答えは簡単だ。

ネコアルクが伸ばした左手の爪で男の右腕を切り飛ばし更に爪を高速で振り回し細切れに切り裂いたからだ。

その答えに気付かない暴徒達を無視して二人の元に近付いたネコアルクはいつも見せている笑顔を見せて大丈夫と声をかけた。

だが、ネコアルクの顔を見た未来は自分達が知っているいつものネコアルクとはどこか違うように感じた。

『未来ちゃん、響ちゃん。遅くなってごめんね。もう大丈夫、私が終わらせてくるから…』

『ま、待ってネコアルク！終わらせてくるってどう、言う…』

トーンツ

『ごめんね、未来ちゃん。ここから先は貴女には耐えられないから』

ネコアルクの言葉を聞いた未来はその言葉の意味を聞こうとしたがネコアルクの朱い眼を見た瞬間、強い眠気が襲い掛かりそれに抗えず眠りに落ちた彼女を優しく受け止めたネコアルクは謝りながらゆっくりと地面に横にする。

未来を横にしたネコアルクは目線を血を流して気を失っている響に向けて彼女の身体を優しく抱き起こして、両手に展開したキャッツリカバリーオーラを彼女にかけながら意識が戻ってない彼女の耳元に謝罪の言葉をかける。

『ごめんね響ちゃん、遅くなって。でも安心して次に目が覚めたら、少しは平穏に戻るから……だから』

——もう少しだけ眠ってね。

響の傷がないのを確認したネコアルクはゆつくりと響を横にした後、ゆつくりと赤い。否、朱い魔力がその小さい身体を纏わり覆いついくし、その姿を変えていく。

『……お前達は越えてはいけない一線を越えた』

暴徒達はようやくネコアルクが自分達の背後にいと気付き後ろを振り向いたが、ネコアルクから漂う濃厚な殺気を受け身体がすくみただじつと観るしか出来ない。

『…ただ生き残った。…ただ生き残っただけなのに、……どうして！  
どうしてこの娘をここまで傷つけた!!』

そうしているうちにネコアルクの身体変化が終わりその姿を現した。

——それは、この世の者とは思えない美しさを持っていた。

『覚悟しなさい。人間共』

——月のように輝きを持つ金色の髪。

『私の大切な家族を傷つけた罪は重い』

——血のように紅い瞳。

『ただでは死なせない』

——白い服と黒いロングスカートを翻した冷たい表情をしたこの世の者とは思えない絶世の美女。

『あの娘が受けた苦しみをその身体と魂に刻み込んでから…』

——殺シテヤル——

紅い瞳を血のように朱く染めて、未だ状況を理解してない暴徒達に向けて呪詛を放った。

・  
・  
・

??? 視点。

ーグチャリー

と赤い液体を口から吐き出したナニカを壁に叩きつける。  
壁に叩きつけられたナニカは死んでないのか呻き声をだしている。

『  
↓  
』

ナニカを壁に叩きつけたワタシを見た他のナニカ達は叫び声をあげながらワタシから逃げ出した。

ああ…、ギヤアギヤアギヤアギヤアと煩わしい。

ナニカが死にたくない、どうしてこんな目に、自分は悪くないと口にしてるが…

オ前タチガアノ娘ニシタモノニ比ベタラコンナモノデハスマナイゾ

魔力で強化した両足で地面を蹴り逃げ出したナニカの一つ二向け  
て左手を振りオロシテ地面に叩きツケタ。

叩きツケた時にナニカの吐き出した温かい液体がワタシの顔二付  
いてシマツタ。

顔に付いた液体を右手で拭ぐい確認してみるト赤い血ガベツタリ  
と付いてイタ。





イ声を挙げ続けた。

ーガッター

物音が聞こえた。

『ひいつ!』

『ハハハハハハハハ……。アア、マダ生きテタノ? シブトイワネエ?』

『ば、化け物!』

『化け物トハヒドイワネ? アナタタチがアノ娘にシテキタ事ヲ見レバアナタタチダツテ立派ナ化け物ヨ?』

物音が聞こえた方ニ顔ヲ向ケルト、最初ニ腕を斬リ飛バシタ男ガ引キツツタ表情ヲ浮かベ、涙ヲ流シナガラ地面ヲ這イズツテ、ワタシカラ逃レヨウトシテイタ。

『安心シナサイ。貴方ニハアノ娘ニ血ヲ流シテクレタ礼ヲ返シテナイカラ、一息デ殺シテアゲル』

『うあ、うああああああああつ!』

ユックリト右手ヲ上ゲナガラ、叫ビ続ケル男目掛ケテ右手ヲ振り下ロシタ。

—もうやめてネコアルク—

ソノ言葉ト同時ニ、聞き覚エガアル声ト共ニ背後カラ抱キシメラレタワタシハ、振り下ロシタ右手ヲ男ニ当タル直前デ右手ヲ止メタ。

『ヒ、ビキ…:チャン?』

『うん、そうだよネコアルク。私はもう大丈夫だから、これ以上人を傷つけないで』

ソノ声ヲ聞イタワタシハ、ユックリと思考がクリアになっていくのを感じて自分を後ろから抱きしめてくれる響ちゃんに顔を向け彼女に謝罪の言葉を口にする。

『響ちゃん、ごめんない! 私は…:私は!』

『なんで謝るの?』

響ちゃんは何故私が謝るのか解らず首を傾げて質問してきた。

『私はっ！貴女が苦しんでいるのを知っているのに貴女を護れなかった！貴女が傷付いているのに傷付けた奴等を殺さなかった！私をもっと早く行動していたら貴女をこんな目に合わせなかつたのに！合わせないことが出来たのに！それなのに！私は!!』

私は響ちゃんに今日まで起きた出来事を彼女に全てぶちまけた。学校で虐められていたこと、街を出歩くと言葉と共に石を投げられたこと、買い物しようとしても品物を売ってくれなくなったこと、今日みたいに彼女に恨みを持った人間に傷つけられたこと。

それでも彼女は、自分が辛い目にあつても、泣きたいのに我慢して無理やり作つた笑顔を自分に心配かけないように向けてきた。

そんな彼女の努力を無駄にしないように未来ちゃんと一緒に彼女の支えになろうとした。

——今日の事が起きるまでは。

『ごめんなさい、ごめん…なさい。ごめんね…響ちゃんっ』

私は身体の向きを響ちゃんに向けて、彼女の身体を抱きしめ泣きながら彼女に謝罪した。

謝つても彼女は許してくれないだろう。

その気になれば彼女を助けられたのに今回の事が起きるまで助けなかつた私を彼女は絶対に許してはくれないだろう。

もしそうだとしても、その時は彼女の前から姿を消そう。私にはもうそうするしか…

『……ばか、なに言ってるの？私はもう助けてもらっているんだよ？』

『えっ？』

予想していた違った彼女の言葉を聞いた私は顔を上げて彼女の顔を見た。

そこにはいつも私に向けてくれた優しい表情を浮かべた響ちゃんの顔が目の前にあつた。

『私が悲しい時も辛い時もネコアルクは私を元気づけてくれた。お父さんがいなくなつて落ち込んでいた私を抱きしめてくれて慰めてくれた。ドジでどこか抜けているけどね、私はそんなネコアルクが傍にいてくれたから今日まで頑張つてこれたんだよ。だから、自分を責め

ないで』

『響ちゃん、ありがとう』

私は響ちゃんの顔を改めて見てお礼を言った。

『うん……あれ？なんか……急に眠、く？』

『ありがとう響ちゃん』

私の眼を見た響ちゃんは睡眠の魔術にかかり、可愛い寝息をたてながら眠りについた。

『……………いるんでしょ？店長？』

響ちゃんを優しく横たえてから、この姿になってから感じた気配の主に声をかけた。

『……………フム、ようやく声をかけたか。やれやれ、このまま出番はないのかと思つたよ』

私の声に答えてからその姿を現したのは黒いカソック服をきた長身の男がゆつくりと靴音を響かせながら私の前に立った。

『それと、バイト中はともかく今の私は店長ではない。この姿の時は神父と呼んでくれたまえ』

そう言つて濁つた眼で胡散臭い笑みを私に向けてくる。

本当、あの姿の私だとなんで息が合うのか解らないわ。

『フ、この手の後処理はこちらでしておこう。君は彼女達を家に連れていくといい』

『ええ、後のことはお願い』

店長——ではなく神父に後始末を押し付けて響ちゃんと未来ちゃんを抱えてこの場から去ろうとした時、神父から声をかけられた。

『ああ、そうだ。ついでに彼女達の記憶を修正してあげようか？』

『断るわ。貴方に任せたらこの娘達の性格がねじ曲がってしまったら大変よ。それを任せるなら自分でやったほうがまだマシよ』

『おやおや、やはりその姿になった君とは相性が悪いようだ』

『よく言うわ、白々しい』

陰険な笑みを浮かべた神父にそう言つて、今度こそ私は響ちゃんと未来ちゃんを連れて廃工場を後にした。

・ ・ ・

現在。S・O・N・G・トレーニングループ。

ネコアルク視点。

ドーモー、お久しぶりー。ネコアルクデース。  
いやー今回は久しぶりに装者達のみんにやと一緒に訓練をしたん  
にやけど……

「コラアアアアアッ！ネコアルクテメー！」

ーブンツ！ブンツ！ー

「ニヤハハハハハッ！」ダダダダダッ

訓練で隙だらけになったみんなにやについてイタズラをしてしまった  
にや。

「このっ！当たれ！」

ードンツ！ドンツ！ー

「甘いにや！」ニヨロニヨロ  
もちろん。

「せいっ！」

ースパッ！ー

「プラナニア〜」ペタリ  
奏さんだけでなく。

「ハアアアッ！」

ーブンツ！ー

「メタル〜」カキーンツ  
他のみんなにやにも

「やあああああっ！」

ーバシユシユッ！ー

「デース！」

ージャキンツー！ー

「CATフィールド！」 キュピーンツ

イタズラを仕掛けたにや！（ΦωΦ）ドヤア

「」「ゼエ、ゼエ、ゼエ、ゼエ………！」「」「」

おや？この程度の運動で息が上がるとはまだまだ修行が足りませ  
んなく？ニヤハハハハハハツ！

「お〜ま〜え〜な〜！」

おお？流石は体力が装者達の中で一、二を争う奏さん。誰よりも早  
く立ち上がるとは、そのガッツに惚れたにや。後でGCBシール1枚  
進呈しよう。25枚集めたらグレートキャットビレッツにご招待！  
画面の向こうみんなにやも集めよう！

「誰がいるか！それより、訓練中にイタズラはやめろといつも言っ  
てんだろうが!!」

「え〜、だって、目の前にイタズラのチャンスが転がっているならそ  
れを実行するのがアチシのポリシーだし〜」

「」「捨ててしまえ！そんなポリシー！」「」「」

「にやが断るー！」

その後、再び鬼ごっこが開始された。（アチシ以外みんなにや鬼だ  
けどね）

・  
・  
・

嬉しかった。助けるのが遅れた私を彼女は許してくれた。

嬉しかった。こんな私<sup>化け物</sup>を彼女は受け入れてくれた。

彼女が私に救われたように、私も彼女の言葉に救われた。

なら私は彼女が挫けないよう後ろから支えてあげよう。

—— 例え

大切な人を護る為なら……

ワタシは

終わり

辛そうで辛くない、むしろ辛さを認識したくない赤い食べ物、なくんだ？

ネコアルク（ギャグモード）視点。

ドーモ、ネコアルクデース。

今日はいつも休みを取らないエルフナインちゃんともう一人を連れて、この街に移店した知り合いがやっている中華料理店にきたにや。

「しっかし驚いたにやー。店長つてばいつの間にかこの街で移店したにや？言ってくれたらお祝いしたのに」

「なに、元から趣味で初めた店だ。別に知らせる程ではなかったのにな」

そっかー。んで？いつからここに？

「ちようど半年ほど前だな。確かお前がテレビに映っていたな」

アチシが半年前に映ってた？んーと？・・・あ！

「もしかしてマリアさんがフィーネとして世界に宣言した時かにや？」

「ああ、確かそんな事があったな？自身を巫女と偽った女の道化ぶり  
はなかなか見ものだった」

おおー・・・相変わらずのようだなにや。

「あの一、ネコアルクさん。ボクはこんなことをしてる暇はないんで  
すけど・・・」

おっと、エルフナインちゃんがいるの忘れてたにや。

「ゴメンねーエルフナインちゃん。紹介するにや。この人はアチシが  
昔お世話になった店長。名前は」にやまえ

「言峰綺礼だ」

「あ、はい！ボクはエルフナインです。よろしくお願いします」

「ああ、こちらこそよろしく頼む」

よしよし、いつもS・O・N・G・内にいる職員や響ちゃん達以外



知り合いがいによいから、知り合いが増えて良かったにや（中身を知らなければ）

さてと

互いに自己紹介をした二人を見た後、アチシはチラリとこの店に来てから黙ったままのもう一人にこえをかけたにや。

「チョットチョット、さつきから黙ってないでお前も自己紹介したらどうにや?」

「……この状態で自己紹介とかできると思っているのかあつ!」

視線の先には縄で身体を縛られたキャロルちゃんがアチシを睨みながら声を挙げたにや。

だーって、こうでもしないとキャロルちゃん素直について来てくれないから……縛っちゃいましたにや!

「ましたじやないだろ!いきなり後ろから襲われた後、縛った状態でこんなところに連れてきやがって、何考えているんだ貴様あ!!」

「キャ、キャロル落ち着いて。今ほどこから」

エルフナインちゃんが怒り心頭のキャロルちゃんを宥めながら縄をほどこいてあげてるにや。

「ご注文は?」

「麻婆一つ」(ΦωΦ)

「無視するな!」

もー、キャロルちゃんって相変わらず怒りっぱいんだから」(ΦωΦ)  
Φ)「フーヤレヤレ

「誰のせいだ!誰の!」

「あ、店長。この怒りっぱい金髪ツリ目でツルペタロリからムチムチボディになれて、オレっ娘で錬金術師の属性山盛りの少女はキャロルちゃんにや。さらにツンデレ」

「勝手に間違えた自己紹介するな!そして誰がツンデレだ!」

「ほう、中々面白……面白いのがきたな。よろしくな少女よ」

「おい、今言い直したのに面白いと言ったな?どういう意味だおい」

「ねー?面白い娘でしょ?」

「ああ、確かにからかいがあるな」

「き、さ、ま、ら〜ら〜!!」

おおーつと? キャロルちゃんが両手をワナワナさせて怒りを露にしているにや。

もう、お腹が空いているからそんなにやに怒りっぽくなるんだにや。

ほら、アチシの奢りだから好きにやのを頼みにや。

「ほらキャロル、ネコアルクさんがこう言ってるからお言葉に甘えよ? ね?」

「…フン! いいだろう。なら、この一番高いラーメンを頼んでやる」  
どれどれ? とキャロルちゃんが指定したメニューの品を見てみる  
と――

「つて、キャロルちゃん! 本当にこれを頼むのかにや!? 2つの意味で色々と言バイやつにや!」

「ほーう、貴様がここまで慌てるとはな? 会計の時間が楽しみだな」

だ、ダメにや。キャロルちゃん値段だけを見て頼んだから自分が何を頼んだか解つてにやいにや。

「それで、君は何を頼むのかね?」

「あ、えつと…ボクはこの炒飯をお願いします」

おや? エルフナインちゃん遠慮しないでもっと頼んでもいいけど?  
?

「いえ、ボクはこれで充分です」

あらやだ、この子本当にいい子にや。

「了解した。注文を確認するぞ? 麻婆豆腐一つ、炒飯一つ、そして――

――泰山スペシャルラーメンとその根元の先に〜が一つだな」

「え?」

あ、エルフナインちゃんが店長が何を言ったのか聞こえてキャロルちゃんに心配の目を送っているにや。

「すぐに取り掛かろう。少し待て」

そう言つてエルフナインちゃんがキャロルちゃんに伝えようとする前に店長が厨房に戻って行ったにや。(振り返る瞬間、店長の口元が笑いを堪えていたのを見たにや)

キヤロル視点

フン。全く何故オレがこんなナマモノに負けたのか未だに信じられん。あの時、コイツの邪魔が入らなければ装者達を倒せたものを……!

何?あの時の戦いで記憶が消えてる筈なのに何故消えてないのかって?

フ、それはな……

ーガツ!ー↑ナマモノの頭を両手で掴む

「にや?」(ΦωΦ)ナニナニ?

「このナマモノのせいであんなアホみたいな結末で終わったんだあああつ!!」

ーギリギリギリギリッ!ー

「アイタタタタタタタタタタツ!?潰れる潰れる!?いきなり何するにやあああああつ!」Σ(Φ□Φ)

・ ・ ・

・ ・ ・

あの戦いの時、記憶の大半を燃やし作り上げた碧の獅子機でシンフォギア装者達を消し去ろうと大切なパパの記憶も燃やそうとしたその時……

(??ω??) キュピーン！

『必殺、キャッツフリーズ電波！』ミワワワ〜！

『なっ!?身体が動かない!?』

いつの間に碧の獅子機の中に入り込んだネコアルクが出した怪電波を背後からまともにくらいオレの身体が石みたいになり、更に記憶を燃やせる事も出来なくなった。

『き、貴様……。オレに……。な、何を、し……。た!?』

『ん？何って？まー、簡単に説明すると……。催眠電波?』

『出した奴が理解してない技を繰り返すな!』

動かない身体をなんとか動かそうとしたが、指先はおろか目すらも動かせず、声を振り絞って背後にいるナマモノに声をかけたが、奴自身が疑問の声を挙げたのを聞いて思わず突っ込んでしまった。

『そー言ってもねー。この技は昔山に行つたときに出会つたメイド服を着た仮面の大男から伝授した技の一つで、確かくらつた相手を石のように固まらせる技だつたかにや?』

『なんだそのふざけた技は!?舐めていゝのか!!』

『舐めるってこうかにや?』ベローリ

『ひあん!つてどこを舐めてるんだ貴様!!』

『膝の裏』

『変態か!?』

そもそも、人が言った言葉を鵜呑みにして本当に舐める奴がいるか!

『ここにゝるにや!』

回想なのに反応するな!

『くっ!それで、何故貴様がここにゝる?コイツを作る時は近くにゝなかつた筈だ!』

『どっつて?..(っ)から?』パカッ

『.....』

何もない筈の位置に何故かある不自然な扉をあける光景を見て思考が停止した。

色々言いたいことはあるが一つだけ言わせてもらおう。

.....物理法則に喧嘩売っているのかあ!!

長い時を生きてきて初めて理解したくないと思ったのはこの時だった。

『フ、フ、フ、遊びはここまでにして今からお前にアチシの奥の手を味合わせてやろう!』

『奥の手だと!?!』

それを聞いたオレは奴を止めようとするが、まだ身体が動かせずそうしている間にあのナマモノから技が繰り出された。

『いくぞ!あの仮面メイド男から教えてもらいアレンジした技の一つ、キャッツドリーミング精神悶絶音波光線!』

『しまっ.....!?!ふああああつ!?!な、なんだこれは!!な、ガリイ!?!それにお前達どうしてここに?待て!な、何をするつもりだ!?!やめろやめろやめろ!や、イヤアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!?!』

『ニヤハハハハッ!これぞ相手の深層心理に働きかけ相手に強制的に夢を見せ精神を疲労させる技。これをくらえばさすがのお前も耐えきれまい!』

あのナマモノが何か言っていたが、奴から見せられた幻覚から必死に逃れようとしたが気絶すらもできずただひたすら悪夢を見せられ続けた。

そこから先はあまり覚えていないが――

『シーと.....少しやり過ぎたかにや?..』

ーズガンツ!ー

『ズガン?..』

『ネコアルク.....』

『にやあ!?!響ちやん!?!』

『もう一つ未来が言っていた誰かを傷つけることじゃないって事ともう一つ言われたのを思い出したよ・・・』

『え、えーとどんな言葉でしょう?』

『それはね、私の拳は・・・バカな事をしてるネコアルクを止める為の拳だあああああッ!!』

『あれえ!?!原作と違ってデカイ拳が二つつて響ちやん待っ・・・ア  
ニヤアアアアアアアアアッ!?!』

そんな出来事が微かにオレの耳に入っていた。

・  
・  
・

あれほど・・・あれほど屈辱の敗北は初めてだったなあ!本当に!!  
何?あの時見ていた幻覚の内容は何だと?

・・・い、言えるかそんな事!?

「どうしたのキャロル?顔が真っ赤だけど?」

「何でもない!」

エルフナインの言葉を返しながら反対側を向くと料理を作り終えた店主が注文した品を持ってきた。

「待たせたな、さあ食べたまえ」

「あ、料理がきたよ一緒に食べ・・・よ・・・う」

「どうした?ただの料理に何を驚い・・・て・・・」

エルフナインが出された料理を見て固まっているのをみて疑問になつてオレも料理を見てみるとそこには――

ーグツグツー

――赤、いや紅い色の何かが目の前に存在していた。

「なんだこれは？」

「何って・・・麻婆だが？」

店主にどうしてと質問すると店主は当然だろと言った風に首傾げる。

「見れば解るわ！オレが言いたいののは注文したのと違う品になっているのかと聞いているんだ！」

「なんだそう言うことかよく見るがいい。底に申し訳程度に存在しているだろう？」

「うわ！本当だ！麻婆の下にほんの少し入ってる!？」

店主に言われ確認したエルフナインが驚きの声を挙げる。

「ああ、ちなみに君の麻婆は少々特別でね。他の麻婆より・・・別格だ」  
「だろうな！どうみてもオレのだけ紅を通り越して朱くなっているからな！」

「更に言うとその麻婆を作るのに貴重な食材をふんだんに使用している。だが、私の前でそれをやるというのならそれ相応の罰を与えなければ・・・そういえばちようど豚骨が切れていたな？」

そう言つて店主はどこから出したのか骨ごと斬れそうな包丁を出して、一般人が出してはいけない気を発しながらこちらを見る。

「く、食べればいいんだろ！食べれば！」

オレは舌打ちをしてから、エルフナインは震えながら店主が出してきた料理を同時に口にする。

「うぐ!？」

「うみゆ!？」

「か、辛あああああ——いっ!!!？」

その日からオレとエルフナインは麻婆が嫌いになった。

## アチシ色に染めてやるにや

### ネコアルク視点

ハイイ、全国70億人のネコアルクファンのみにはや様、お久しぶりにや。

みんなにやの、アイドルツ！ネーコアルクにや。(みーたん風)みんなにや覚えてるかにや？(ΦωΦ)??

え？アイドルじゃなくどっちかって言うとUMAか妖怪の類いだろうって？

……………。

誰が人外で常識外れの化けネコにや!!

ま、冗談はそこまでにして今日はアチシにとって重大なイベントをやっている最中にや。

ん？何のイベントなのかって？

フ、フ、フ、それはね…………。

「だからあ！サンジェルマンさんにはこっちの乙女チックな服とかが似合うにや！」

「いーえ！サンジェルマンにはこっちのかーいい服とかのほうが似合うに決まっているわ！」

誰がサンジェルマンさんに似合う服はどれだという議論をサンジェルマンのお仲間のカリオストロことリオっち、プレラーティことプレちゃんと言合っているところにあ。

「あーもう！埒があかない！ちよつとプレラーティ。さつきから黙っているけど、あんたはサンジェルマンが何が似合うのか見せてみなさいよっ！」

「そーにや、そーにや！プレちゃんはサンジェルマンさんには何が似合うと思っっているのにや！」



議論が平行線になり埒があかないと言ってリオッチが先ほどから黙ってソファアに座っていたプレラーティイことプレちゃんに質問し、アチシもそれに便乗してプレちゃんに話しかけたにや。

「…フム、決まっているワケダ。サンジェルマンに似合う服は……」

「これなワケダ！」

「こそ、それは!?!」

アチシ達の質問に答えたプレちゃんはソファアから立ち上がり、足元に置いてあった紙袋を漁って取り出した物をアチシ達に見せ、それを見たアチシ達は驚きの声を挙げたにや。

その見せてきた物、それは……。

「ゴスロリ……だと!?!」

「…フツ」ニヤリ

そう、プレちゃんが見せてきた物とは黒い布地にフリフリ白いレースがふんだんに付けられたゴスロリ服だったのにや!

「グフ……ッ!や、やるわね…プレラーティイ。いつも男装しているサンジェルマンに対してまさかのゴスロリなんて、そういうの……嫌いじゃないわ!!」

「ウーム、流石のアチシもその選択肢は思いつかなかつたにや……。プレちゃん……恐ろしい娘!!」Σ(ΦωΦ)ノ

それを見たりオッチは一瞬で脳内にゴスロリを着たサンジェルマンさんの姿を想像して吐血(と鼻血)を出しながらプレちゃんのセクスを誉めて、アチシは昔の少女マンガみたいなりアクションを出したにや。

「ハッ……ゴホン。……ではサンジェルマンさんに着せる服はプレちゃんが選んだゴスロリ服とするにや。異論はないかにや?」

「意義なーし!」

「私が選んだ物だから、当たり前なワケダ」

リオッチは鼻血を出しながら賛成の声を挙げ(早く止めるにや)、ゴスロリ服を提示したプレちゃんは腕を組んで誇らしげに(ナイ)胸を

張ったにや。

「……貴女達、そういうのは本人がいない時にしてちょうだい」

とアチシ達が盛り上がっている中、ソファアに座ってそれを最初から観ていたサンジェルマンさんから呆れた声をかけてきたにや。

「イヤー、スミマセンねーサンジェルマンさん。つつい熱中してしまつて…」

「アーシ達からもごめんねサンジェルマン。ちよつと夢中になつてたわ」

「つい熱くなつてしまつたワケダ。……すまないサンジェルマン」

「いや…謝っているけど、反省してないでしょ貴女達」

本人がいるのに白熱した議論をしまい、アチシ達三人（二人と一匹？体？）はサンジェルマンさんに謝るとサンジェルマンさんは呆れた目をアチシ達に向けてきたにや。

おつと、なかなか観れにやいレアな表情。気付かれないようにこっそりとキャッツスクショ・アイでサンジェルマンさんのお顔を撮る、それがこのアチシ、ネコアルク！（㊦ω??）カシヤツ

「……ところで、その手に持っているゴスロリ服と化粧道具一式は何？」

「あ、これ？サンジェルマンに着せる服が決まつたから、早速着せようと準備してたの」

「安心しろサンジェルマン。私達が全力でお前を可愛く仕上げてるワケダ」

「そして！着替え終わった後はアチシのポケットトマネーで用意した撮影機材でサンジェルマンさんの色々なポーズを撮らせてもらうにや！」

「何故その努力を別の方向にかきさないの!?!」

アチシ達から漂う異様な熱意にサンジェルマンさんはソファアから立ち上がりながら正論を指摘してきたにや。

む、サンジェルマンさんが玄関に向かつて逃走しようとしている。

フツ、……逃がすとおもいでか！

「リオつちープレちゃん！あのコンビネーションでいくにやよー」

「ええ！」

「よくってよなワケダ！」

「カリオストロ、プレラーティ！なんで息が合っているの貴女達!!? あ、ちよつと待つ……キヤアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!?」

この日の為に入念に下準備をしてきたアチシ達の（魔の）手からから逃げられると思つたかにやサンジェルマンさん?（Φ▽Φ）

・  
・  
・

### サンジェルマン視点

私達が所属していたパヴァリア光明結社の局長、アダム・ヴァイスハウプトとS・O・N・G・に所属するシンフォギア装者達の戦いから数週間が経ち、生き残つた私達はS・O・N・G・に身柄を拘束された。

幾多の命を奪つた大罪を犯した私達に重い罰を受けるだろうと思つていたが――

『君達の持つ錬金術の力を人の為に使わないか?』

とS・O・N・G・の司令官の風鳴弦十郎からそう提案された私達は最初は「何を馬鹿な事を」と思つたが、人類の救済の為に人々を傷付けた錬金術の力を立花響のように誰かを助ける為の力になれると思案して、私はプレラーティとカリオストロと話し合い二人からはまんざらでもない表情を浮かべ了承を得た後、私達はその言葉を受け入れS・O・N・G・に協力することにした。

私達が今こうしていられるのはあのナマモノのおかげというのは複雑に感じるけど……。

あいつがいなければ私達は米国が放つた反応兵器と共に消えてい

たかもしれないな。

・  
・  
・

神の力に呑み込まれた立花響を助ける為に装者達と協力して彼女を救出した後、私一人で米国が放った反応兵器を止める為に空を飛んで行く途中…

『コニヤワチ：ブハツ！』

『がっ!? くっッ!? …いきなり人の前に出てくるな貴様っ!!』

突然目の前に現れたネコアルクと正面から衝突し、鼻を押さえながら目の前のナマモノに声を挙げる。

『アイタタタ…：以外と石頭にやのねあんた。イヤね、ちよつとあんたにお届け者がありました』

『届け物?』

『そうにや、えーと何処に居るんだっけ? ……ああ、いたいた』(ΦωΦ) / (●) ( ) ゴソゴソ

そう言つて何も無い空間に現れた黒い穴に両手を入れてナニカを見つけたのか、それを取り出すと…

『ムグウウウウウウウウツ!?』

『つてカリオストロにプレラーティ!? 生きていたのか!?!』

装者達との戦いで死んだと思つていたプレラーティとカリオストロがファウストローブを纏つたまま、ロープで身体を拘束され二人の口には猿轡をされた状態を視た私は驚きながら二人が生きていた事に内心喜んでいた。

ネコアルクから引き渡された、カリオストロとプレラーティを受け取り二人の拘束を解こうと先に猿轡を外していると最初に猿轡から解放されたプレラーティがネコアルクに声をかけた。

『貴様、何の真似たワケダ！あの反応兵器を消さないとお前の大事な家族どころかこの国が滅びてしまうワケダ！』

『それにプレラーティが精製したラピスの弾丸をどうするつもりよ!?!』

『ラピスの弾丸?』

後からプレラーティに聞いたら、アダムに撃ち込む為に精製したラピスの弾丸を突然現れたネコアルクに身体を拘束された後、精製が完了したラピスの弾丸をあの手で奪われたと話してくれた。

『それは解っているにや。でもあのミサイルを止めるにあの姿を維持する為にはそのTSロリが精製したこの力が必要にやんでにや。』

それに…あなたには響ちゃんを助けてくれただけじゃなく、自分の命を犠牲にして彼女達の命を守ろうとしてくれてるにや。アチシはね響ちゃんの手を掴んでくれたあなたに感謝してるにや。だから——』

言葉を切ってからゆっくりと私の前に近づいてネコアルクは私の耳元に口を近づけ口を開いた。

——響ちゃんにごめんねと伝えてね?サンジェルマン。

『?!?!貴様何を……あつ?!』

その言葉の意味をネコアルクに質問しようとした直後、私達の身体に突然現れた鎖に縛られ、ネコアルクはラピスの弾丸を片手に持ち私達から離れていき単身で反応兵器に向かって行った。

『お前、何をするワケダ!?!』

『そーよ!死ぬつもりなの!?!』

プレラーティとカリオストロが離れていくネコアルクに声をかけるがネコアルクはスカートから炎を吹き出しながらその問いに答えた。

『それはこっちのセリフにや。アチシが止めなかったらあなた達が死ぬつもりでアレを止める気でしょ?ようやく解り合えたのに最後の最後に死んでしまったら元も子もないにや。』

『そうなるのは、神が許してもアチシが許さねー。まあ、要するに――』  
答えながら手に持っていたラピスの弾丸を砕いた瞬間、ネコアルクの姿が変わり猫耳と尻尾を生やした金髪の美女の姿に変わった。

――そんなあんた達を私が気に入ったからっ!!

そう言った後、ネコアルクは身体全体に朱いオーラを纏い、空中に現れた鎖を足場にし更に加速して反応兵器に近づいて行った。

どんどん離れていくネコアルクの姿を眼で追って行くとネコアルクのある言葉が私の耳に入ってきた。

『あれが響ちゃんを殺す為に放たれたミサイルですって?……そうはさせない。』

もう二度と……もう二度とあの娘を傷付けさせてたまるものかああああああアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!』

その言葉の後、ネコアルクから放たれた朱いオーラが反応兵器を包み込むように球状型に展開した瞬間、反応兵器がその中で爆発し続け、更に彼女は爆発の規模と威力を最小限にするためなのか両手を広げそれを圧縮するように両手を重ねようと力を込める。

――だが。

爆発の威力が大きいのか、それとも別の何かが原因か、それ以上その大きさを変える事ができずネコアルクから苦悶の声を挙げられる。

『っ……この感覚は……魔力!?まさか人工的に造られた宝具なの!?

ウ、グウウウウウウウツ!で、でも……たかが人間が造った人造宝具なんかにはいいいい……負けて、たまるかああああああっ!!』

その言葉の後に両手を重ね、球状型になった反応兵器が更に縮小した瞬間。

『あ、やば……』

『ネ……ネコアルクウウウウウウウウッ!!』

爆発を抑えていた朱いオーラが消えて反応兵器に近づきすぎていた彼女は、爆発に巻き込まれその姿を私達の前から消えていった……。

『ネコアルクウウウウウッ!!』

『なんでだよ……なんでお前が死ななきゃならねーんだよ!』

『冗談だよ……冗談だと言ってくれよ!ネコアルク!』

『ネコアルクさん……あっ』フラリ

『セレナ!』

『嘘デス。いつものネコアルクの冗談デス。あの非常識がこんなことしてくれたる訳ないデス……』

『切ちゃん……』

ネコアルクが爆発に巻き込まれたのを視た装者達は、涙を流しながらあの子の名前を叫んでいた。

そして、装者達の中で一番辛いのは……

『……ネコアルク?なんで?なんでいなくなるの?』

『響……』

立花響、ネコアルクがいなくなったのが信じられないのか彼女は寄り添っていた小日向未来の手を借りて起き上がり、なんとと言葉を何度も繰り返す。

『……嘘つき、嘘つき嘘つき嘘つき嘘つき嘘つき嘘つき!ネコアルクの嘘つき!!』

約束したのに、私の前からいなくならないって言ってくれたのにどうしていなくなるの!ネコアルクの嘘つきいっ!!』

そう叫んだ後彼女は地面に蹲り、涙を流しながら泣き叫んだ。

……彼女の中でネコアルクは大切な存在のようだ。無理もない、私も母さんが亡くなった時も彼女のように声が枯れるまで泣き叫んだ。

泣いている立花響に声をかけようと口を開こうとしたら……

ーブロロローツ!!ー

ーキキイツー！ー

泣き崩れた装者達の元にピンクの車が走ってきて、私達の前に急停止した後、ドアが開いて車から降りてきた人物の姿を見て私達は驚きの声を挙げた。

『あー、危なかったにやあ。あ、助けてくれてありがとうにや兄貴。おかげでみんなやの下に戻ってこれたにや』(ΦωΦ)／へーイ

『フツ、なーにいいって事よ。同じ境遇の仲じやないか？困った時はまた呼びな。それにお前には力があるが足りないものが一つある』

ネコアルクが礼を言った赤いサングラスの男がネコアルクに足りないものがあると伝えるといきなりエンジンを上げて、この場から走り出すと周りにある瓦礫や地面が穴だらけになりながらピンク色の車の形が変形した。

ーブオオオオオオンツ!!ー

『お前に足りないものは、それはく  
情熱思想理念頭脳気品優雅さ勤勉さ！

そしてエなによりもオーーーーーー

速さが足りない!!』

そう叫びながら、彼は私達の前から走り去った。

『あ、ただいま。これお土産ね』

と何事もなかったのように挨拶したネコアルクを見て、全員ズッコケてしまったのは言うまでもないわ。

そして現在



「おおく！」

「似合ってるわよサンジェルマン！」

「ああ、狙い通りなワケダ」

「……く、殺せ！」

結局、彼女達から逃げられず捕まってしまいプレラーティが用意したゴスロリ服を着せられた。

うう、あまりの恥ずかしさに顔から火が出そうだ……。

「いいねいいねー！あ、もう少しお尻を突きだしてくださいますか？」カシヤカシヤッ

「って、お前はどこを撮ろうしてる！下から撮るな！」ゲシッ！

「ニヤバラッ!？」

お前がいなかったら私達はあの場で死んでいただろう。

それにお前が私達の罪を清算させる機会をくれと懇願したと風鳴弦十郎から聞いたぞ？

立花響も甘いがお前も彼女と同じくらい甘いやつだな。

……だが、

そんな甘さがお前達にはちょうどいいかもしれないな。

終わり

# 翳り裂く閃光編その1：別世界の響とネコ○○○○

ネコアルク視点

どうも、ネコアルクです。

只今、並行世界にてノイズを真祖ビームで消し炭にしたところにや。

え？なんで並行世界にいるのかって？それに装者でもないのにどうやって渡ったのかだつて？

イヤー、説明したいんにやけど今はちよーつと難しいかにや。

何故かって？それはね……。

「真祖ビーム！」

「何の、光るビーム！」

―ズバババ―！―

にやーんかアチシにソツクリな黒いアチシ自身と絶賛バトル中にやのよねー。

「ムム……っ、にやかにやかやるなあお主。アチシの真祖ビームを相殺させるとは……ナニモノだ？」

「フ、ナニモノと聞くか……。お互いのビームを交わして既に我輩がナニモノか解っているのだから？」（ーωー）∥／∥∥3フーツ

互いに放ったビームが相殺して距離を取り、アチシは黒いアチシにナニモノかと質問すると黒いアチシはタバコを吹かして質問を返す。

アチシソツクリな姿にビームを放ち、どこかシブイ雰囲気醸し出すセリフ。……さては！

「アチシから別れた別側面のアチシにやのかー！」Σ(ΦωΦ)ズガーンツ

「オイコラ、解っているのにギャグに走るな。我輩達を詳しく知らない読者が信じてしまうだろ」

アチシが言った言葉に黒いアチシが冷静にツツコミをいれてきたにや。

「まあ、それは今はいいとして……、貴様と我輩が相對したらこうなるのは解っていたがな」

「確かに……、世界が違えどいずれはこうして会うのはアチシらの運命か……」

黒いアチシは新しいタバコに火を着けて声をかけて、それを聞いたアチシは答えながら赤いハチマキと赤いマントを取り出してハチマキをオデコに巻き、マントを身に付けたにや。

「準備はいいか？」

「いつでも」

「フ……準備が早い奴は嫌いじゃないぜ……」

そう言つて黒いアチシは自分の足下の影から鎖が付いた鉄球を取り出して構えたにや。

「んじやー改めて……、型月ファイトオオオオオオツッ！」

アチシは息を大きく吸つてから叫びながらマントを翻して飛び上がった！

「レデイイイイイイイ……ッ！」

黒いアチシも叫びながら腰を落として鎖付きの鉄球を振りまわした。

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオツッ!!」

その言葉と共に互いに放つた拳と鉄球がぶつかりあい、ぶつけあつた衝撃が円形状に周囲に拡がっていったにや……ッ！

・  
・  
・

にやんでこんな事になっているのかそれは数日前に遡る……。

数日前、響ちゃんが元気がなく訓練にも支障が出るほど調子が悪くなっていたにや。

翌日になって、エルフナインちゃんと元櫻井女史ことネコフィーネに調べてもらっている間に並行世界に行きき出来る完全聖遺物【ギヤラルホルン】から異変が出てクリスちゃんとマリアさん、そしてセレナちゃんの三人が出ることになったにや。

その任務になんでアチシが着いていく事になったのかと言うと…、未来ちゃんと一緒に響ちゃんから話を聞くと、夢の中の響ちゃんが辛い目にあっていて、それが共鳴しているのかのように現実の響ちゃんにも影響が出ていたにや。

このタイミングで起きた並行世界の任務がアチシには今の響ちゃんの状態と関係あると踏んで、三人と共に並行世界に向かったにや。

んで、並行世界のS・O・N・G.ではなく、二課に接触を果たしその世界に現れたノイズをクリスちゃんとマリアさんとセレナちゃんと一緒にこの世界の翼さんに協力してノイズを倒していると、逃げ遅れた人に襲いかかるノイズをこの場に突然現れたシンフォギア装者が倒した。

翼さんを除いたアチシ達は新たに現れた装者の顔を見た途端、驚きのあまり言葉を失ったにや。

それは……

「……………」

アチシ達が知っているお日さまみたいな優しい瞳ではなく、何者かも拒絶する冷たい瞳を持った響ちゃんが口元を隠すマフラーを付けたギアを纏っていたからにや……っ！

響ちゃんは驚いているアチシ達を無視してまだ残っているノイズを倒そうとマフラーを翻しながらノイズの群れに突撃していった。

「響さん……なの？」

「なんだよあいつのあの眼は……！あいつの眼、あの時の誰も信じられなかったあたしみたいじゃねーかよ！」

「あの娘の戦い方…、まるで自分の中の感情をぶつけているみたいね

……」

響ちゃんがノイズと戦い出したのを見たクリスちゃん達は自分達も残ったノイズの群れを倒そうと行動を再開したにや。

この世界の響ちゃんと共にノイズを倒している中、ノイズ共の一体が響ちゃんに襲いかかろうと背後から飛び上がった瞬間――

「……フツ、喰らえ！光るビーム！」

――ズバーツ！――

響ちゃんに襲いかかるノイズが突然現れた謎のビームによって炭すら残さず消えていったにや。

響ちゃんを除いたアチシ達は謎のビームが放たれた方向に顔を向けると再び信じられない光景を見た！

それは……。

「(スウウ……、プハアアア……ツ) 前にも忠告した筈だぞ嬢ちゃん。あまり前に突出しすぎだとな……。

それとも我輩の説明が難しかったか？」

そこには、色と目付き意外がアチシに姿が似ている黒いアチシがタバコを吹かしながらダンディーな雰囲気醸し出していたにや……っ。

「嘘だろ!? ネコアルクがもう一匹いつ!？」

「あんな非常識が増えるなんて!? 悪夢……いえ、地獄よ!」

「ちよつとお二人さん? さすがのアチシも傷つくよ?」

黒いアチシの姿を見たクリスちゃんとマリアさんが言った言葉にツツコミを入れる。

「ね、ネコアルクさんがもう一匹……ッ!? いつものネコアルクさんもかわいいけど、シブイ雰囲気が出てる黒いネコアルクさんもあれはあれでかわいい……ッ!」

「セレナッ!」

セレナちゃんがかわいいと言ったのを驚いてマリアさんは自分の妹の顔をみる。

ウーン、カオス感半端ない(ΦωΦ)

「うっさいな……、お前の指図は受けないって言ってるでしょ。余計な事はしないでネコカオス」

「何、そう邪険にするなおじさん心がガラスだから娘にそう言われたら泣き崩れてしまうだろ?」

「そのまま溶けて消えれば?後、あんたの娘になった覚えはないから」  
「何!?ネコカオスだと!」

アチシはあの響ちゃんと言った言葉に驚きの声をあげたにや!

「どうした?あの黒いのを知ってるのか、ネコアルク?」

まさか……アイツは……ッ!?

「もしやアイツは……、生き別れの兄さん!?」

—ズゴーツ—

アチシの言葉に響ちゃんと翼さん以外の装者達が地面にひっくり返った。

「何!そうなのか!」

「その子の冗談だから真に受けないで!」

アチシの言葉に翼さんが驚きの声をあげ、それをマリアさんが突っ込んだにや。

「ムッ、そういうお前は……!生き別れた我輩の妹、ネコテイシアか!」

「お前も悪乗りするなよ!!」

黒いアチシが言った言葉にクリスちゃんが突っ込んだにや。

「兄さんっ、ネコバル兄さん!」

「ネコテイシアーツ!」

得意の早着替えで某一年〇争に出ていたピンクの軍服に着替えたアチシは涙を浮かべながら黒いアチシに向かっていったにや。

「……って、誰が兄妹だ!」

—バキイツ—

「……何、この茶番は?」

そこからノイズそっちのけで冒頭に至るにや。

—ネコアルク視点、終了—

—グレ響視点—

「やつと終わった……」

最後のノイズを倒した私はまだノイズが残っていないか周りを見渡して、残っていないと解った後この場から去ろうとしたら——

「待ちなさい、立花響。貴女は何故私達の力を借りずに一人で戦うの？このままだと貴女の身を滅ぼしてもおかしくない」

いつもノイズと戦っていると現れるうるさい奴が話かけてきた。

はあ……、うるさいな……。私なんか構わないでほつといて欲しい。

「帰るよネコカオス」

私はため息を吐いてそれを無視して、鎧を解除してから少し離れた場所でネコカオスにソックリなもう一匹のネコカオスと戦っているネコカオスに声をかけながら顔を向けると……。

「喰らえ必殺！愛とイタズラとナマモノのおおお……キャッツフィ  
ンガー……ビイイイイイムツ!!!」

「刀持ってるのにそこはソールドじゃないの……グ  
ワアアアアアアアツ?!?!」

「……」  
白いネコカオスの目から放たれた赤黒いビームがネコカオスの姿を呑み込んだ。

「身体はネコで出来ている……、血潮はニボシで心はマタタビ……。

アチシに勝とうなんざ数年早いにゃ！ジョージの中に帰れ！」

「グフ……ッ!?我輩もヤキが回ったか……?」

白いネコカオスが倒れたネコカオスに向けて謎の言葉を言うとネコカオスはタバコに火を着けてから一服した後、懐からスマホを取り出してどこかに電話をかける。

―首を出せ……、首を出せ……、首を出せ……―

「ん？」

ポケットに入れてあるネコカオスから渡されたスマホから着信音がした。

取り出して画面を見ると画面にはネコカオスの名前が表示されていた。

近くにいるのになんで電話をするのか疑問に思いつつ、とりあえず電話にでてみる。

「何？近くにいるのになんで電話を？」

「お前がこの声を聞いているということは、父さんはもうこの世にはいないのだろう……どうか父さんの勝手を許してほしい。」

ただ一つだけ……、お前がメイド喫茶デビューする姿をこの目で見られない、それだけが心残りだ。

……いや、まだあつたな。予約済みの沙那の神フィギュアが来週に届くはずなんだが……

「じゃあね」

ああっ!?待てっ切るなっ!?ちよっ、まっ……!!?

私の言葉を見殺したネコカオスは意味不明な言葉を言ってきて、それを聞いた私は電話を切ってネコカオスを置いて私が住みかにしてる隠れ家に帰る。一人で。

―グレ響視点、終了―



## X D 翳り裂く閃光編その2：月の使者と混沌の使者！

前回のあらすじ

―アルク！―

―カオス！―

「合身!!」

―アルク・カオス！―

「さあ、お前（貴様）の罪を数えろニヤ！」

悪のスーパーノイズに対抗する為にネコアルクとネコカオスの二人が奇跡を起こし、右半身がネコアルク、左半身がネコカオスの身体をもつ伝説の戦士、ネコダブルに合体した！

―カオス！マキシマムドライブ！―

「必殺！カオスストリーム！」

―ドオオオンツ!!―

ネコダブルの必殺技、カオスストリームが見事に決まり悪のスーパノイズを倒したのであった。

クリス「嘘は駄目だろ」

(ΦωΦ)「テヘペロ！」

セレナ「かわいい…」

マリア「セレナ!？」

本編始まります。

―グレ響視点―

私がネコカオスと出会ったのは私がリディアン女学院に入学した後、直ぐに学生寮を出て一人で夜の街歩いていた。

当時の私は人目を避けながら街を歩き、近道しようと路地裏に入り歩いて行こうとした時――

『オイオイ……こんな時間に嬢ちゃんみたいな娘が一人でここに出歩

いてたら危ないぜ?』

突然誰もいない後ろから中年男性の声がかけられた。

『何?私がどこに行っただって私の勝手でしょ?』

私はそう答えるとまた後ろから声がかけられる。

『いや、スマナイ。言葉が足りなかったな。心の中で寂しがっている嬢ちゃんがこんな場所に出歩いてたら危ないと声をかけたのさ』

—ピクツ—

『ハッ?いきなり話しかけてきて何言ってるのオッサン?一体私に何の…よう…』

私はオッサンに文句を言おうと視線を後ろに向けるとオッサンの姿を見て喋るのを忘れて呆けてしまった。

何故なら—

『フツ、オッサンか…。嬢ちゃんみたいな娘に言われるとこう…：心にクるな。あれ?眼から汗が?』

口にタバコを咥え、涙を堪える為か顔を上に上げている白に近い灰色の髪に黒い服を着た二本足で立つ糸目のネコみたいなナニカがポリバケツの蓋の上に立っていた。

『お前…何?猫なの?それとも突然変異のナニカ?』

『…ゴホン。我輩はネコであってネコではなく、突然変異のナニカではない』

いや、突然変異でしよどう見ても。

『我輩の名はネコアルク・カオス。ただのハードボイルドな一匹のネコさ…。我輩の事はネコカオスと呼ぶといい、よろしくな嬢ちゃん』

それが私と自称ハードボイルドネコ—ネコカオスとの出会いだっ

—隠れ家—

「……ん、ネコカオス？帰ってたんだ？」

「フム、おはよう、ついさつき帰った。ほら、今日の朝飯だ。顔を洗った後食べるといい」

ノイズを倒した次の日の朝、ごみ捨て場から拾ってきたベッドから起き上がるとあの場に置いてきたネコカオスが朝日を浴びながらタバコを啜え、同じくごみ捨て場から拾ってきたテーブルの上にあるコンビニ弁当が入ってある袋を指差して食べるように促してくる。

「(モグモグ)そういえば昨日のネコカオスにそっくりな奴あれ何？兄弟じゃないって言ってたけどあんたの偽物？」

弁当を食べながらネコカオスに昨日の事を聞いてみるとネコカオスはタバコを吸って、あいつそっくりな奴について説明してくれた。

「(スウウウウ………プハアアア………ツ)ああ、あれか。あれは我輩と同じオリジナルから(どういう訳か)別れた個体、名はネコアルクと言ったな。」

姿は似てるがあいつと我輩は兄妹でもなければ、偽物でもない似て非なる存在だ。更に詳しく言うともそもそあいつと我輩の間には切っても切れない因縁があつてな(ウンタラカントラ)……」

「ふーん」

頼んでもないのに更に詳しい説明をしてるけど私は聞き流しながら袋からおにぎりを取り出す。あ、これおかかだ。

「え、質問しといてスルー？おじさんの説明難しかった？」

「大丈夫、前半は聞いてたから」

「それ、後半は聞いてないって事だよねツ!?」ガーンツ!?

ショックを受けているネコカオスを無視して食べ終わった私は手に付いた米粒をペロリと舐めた。

—グレ響視点 終了—

—ネコアルク視点—

ハイ、ネコアルクにや。

あれからアチシ達は何度か響ちゃんと会ったけど、話す間もなく逃げられてしまったにや。ついでにネコカオスもね。

其処でアチシ発案の【ご飯& a m p ;ご飯でハント作戦】を実行したんにやけど……並行世界でも流石は響ちゃん。

グレても罠にかからずご飯だけを取るとは……!!

…その代わりにネコカオスが罠にかかってたにや。(直ぐに逃げたけど)

んで、一度アチシ達の世界に戻って向こうの弦ちゃんから渡されたデータをエルフナインちゃんとネコフイーネに調べてもらおうとこちら側の響ちゃんと向こう側の響ちゃんの精神が同調して向こう側の響ちゃんの負の感情が一方的にこちら側の響ちゃんに流れ込み、それが原因で響ちゃんが苦しんでいるのがわかったにや。

そして、その状況を打開するには未来ちゃんを向こう側に連れて行かせるために向こうにある神獣鏡を持ってきて未来ちゃんに渡したにや。

一度適合した事もあってかそれか響ちゃんの愛の力で無事に未来ちゃんは神獣鏡を纏う事が出来、一緒に並行世界に行ったにや。

そして向こうの世界に行つて早々にノイズと戦闘に入ると、既にこの世界の響ちゃんとネコカオスが先に戦闘を始めていたにや。

未来ちゃんが声をかけても響ちゃんはそれを無視してノイズを倒しに向かつていったにや。

「響……」

「すまないなお嬢ちゃん。あいつは素直じゃあないがああ見えて根は優しい娘だ。だからそう落ち込むな」

「あ、ありがとうございま……えっ?! 黒いネコアルク!？」

響ちゃんに無視されて悲しい顔をする未来ちゃんに優しい言葉をかけるネコカオス。そのネコカオスに声をかけられた未来ちゃんは礼を言おうと顔を向けたらネコカオスの姿を見た途端、アチシそつくりの姿に驚いたにや。

未来ちゃん、ソイツはアチシに似てるけど別ネコにやよ。そんなに似てるかにや？

・  
・  
・

しばらくしてノイズを倒していくと、以前現れたタコみたいな黒いノイズーカルマノイズが現れたにや。

「駄目、また再生した！」

「くっ、これじゃきりがない！」

アチシ達は現れたカルマノイズに攻撃していくが、攻撃しても直ぐに傷を修復して、じり貧になっていったにや。

「くそっ、このままじゃまた逃げられるぞ！」

「何か奴に有効な手はないのかっ？」

「なら、アチシ達に任せろにや！」

アチシはカルマノイズに対する手段を思いつき、装者達に声をかけたにや。

「何か手はあるのネコアルク！」

「ネコカオス：？なんで白いのと一緒にいるの？」

「フ：ッ、こいつに手を貸せと言われてな。奴を倒せるなら手を貸すのも悪くない」

「よし！いくぞネコカオス！」

「いつでも」

アチシはネコカオスの手を繋ぐと二人で空いている手を上に上げてある言葉を口にしたにや。

!?  
いくぞ読者諸君！アチシ達の動き（ネタの暴走）に着いてこれるか

（ここから二匹の中の人の声を脳内で再生して読んでくださいbyク  
ロトダン）

「デュアルマールブルーウェーブ!!」

その叫びと共にアチシ達の身体が光に包まれた後アチシ達の姿は大きく変わったにや。

まずアチシの服装が白いフリルが付いた胸元に大きなりボンが目立つ真っ白なドレスを着て髪型がポニーテールに変わったにや。

次にネコカオスは白いフリルが付いた胸元に大きなりボンが目立つ黒いドレスを身に付けているにや。

「月の使者！・キュ○アルク！」

「混沌の使者！・キュ○カオス！」

「二人はネコキュ……!!」

「アウトオオオオツ!!」

——【MEGA DEATH PARTY】——

——チユドドドドオオオンツ!!——

「グハアアアアアツ!!」

アチシ達の名乗りが終わった直後、クリスちゃんのツツコミを載せたミサイルがアチシ達に炸裂して空高く舞い上がったにや。

「何ヤバイ事をしてんだよお前ら!? いい加減自重しろ!」

「い、いや実はね、クリスちゃん……。負の感情の集合体であるカルマノイズに正の感情の力をぶつける有効な方法にやんだけど……」

「だからといって色々ヤバイネタはやめろバカ! 消されるぞ!? (読者に)」

「お、おっしやる通り……」ガクツ

クリスちゃんに正論を言われたアチシはそのまま地面に顔を突っ伏したにや。無念!

「……わ、我輩、…今回、とぼっちじゃない……か?」ガクツ  
ちなみにカルマノイズは原作通り逃げられたにや。

—ネコアルク視点、終了—

—未来視点—

カルマノイズに逃げられてしばらくたったある日、私はネコアルクと一緒に公園の奥の林の中で一人で訓練をしてる響を見つけ彼女に私達と一緒に戦ってくれないかお願いしてみると……。

「私に言うことを聞かせたいなら……力で示せばいい。私の拳……当たったら痛いじゃすまないけどね」

「Ballwisyall Nesce ll gungnir tr  
on—」

そういつて響はギアを纏った後、私に拳を向ける。でもその姿を見た私は——。

「それは違うよ……響……」

「……なッ!?!」

ゆっくりと首を横に振って両手で響の拳を包むように優しく握ってあげると響は驚いて私の顔を見る。

「響の拳は誰かを傷つけるものじゃないよ。……だから、そんな悲しいことを言わないで……」

「——ッ——」

—パシッ—

「戦うつもりがないなら、私は私の好きにするだけ……」

「あ、待って響——」

その言葉を聞いた響は、私の手を振り払いギアを解除してこの場から去ろうと歩き出し、私はもう少し響と話をしようと手を伸ばした直後……。

「そんな……どうして!?!」

「——ッ!?!こいつ!!」

私達の前に以前逃げられたカルマノイズが現れた。

「ノイズなんか……全部打ち砕いてやる！」

「Balwisyall Nescell gungnir tr  
on」

カルマノイズを見た響はギアを纏ってカルマノイズに向かおうとする彼女を見た私は一緒に逃げようと声をかけるけど……

「戦う気がないなら一人で逃げればいい。……でも、私は逃げないツ  
!!」

そう言って響はカルマノイズに向かって走り出した。

「響……それなら！」

「Rei shen shou jing rei zizzl  
」

「私は響を一人にしない！絶対に護るんだ!!」

聖唱を唄い神獣鏡を纏った私は響の後を追い、一緒にカルマノイズに向かっていった。

——未来視点、終了——

——カルマノイズが現れる前、ネコアルク達は……——

「このターンで決める！」

我輩はフィールドにいる、麻婆神父！アーカード！そして赤ダルマの三体をゲームから除外して……。

【渋いボイスが似合う男！ジョージ】を攻撃表示で召喚!!」

【渋いボイスが似合う男！ジョージ】

攻撃力80,000

防御力80,000



ネコカオスの手札から渋い壮年の男がネコアルクの前に現れた！  
「ば、バカな!? ジョージだとオ!? そのカードをどうしてお前がツ!?」  
「……フツ。以前、ある理由でとある男から譲り受けてな。その男曰く、このカードを持てば世界の壁をも越ええるとな」  
「ま、まさか伝説のカードをここでみられるとは……!」  
「フツ、そして……これで終わりだ! ジョージの攻撃!」  
「ファンとしては生で聞きたい名言!」  
「グワアアアツ!」

カードゲームをしていた。

— 終わり —

## XD 翳り裂く閃光編その3：私の温かい場所

——ネコアルク視点——

ドーモ、みにやさん約一年ぶりのネコアルクデース。

あれから平行世界の響ちやんがカルマノイズにと一体化してしまったり、米国から研究のため日本にある記憶の遺跡に保管してこの世界に存在する《ゴライアス》とか言うゴモラモドキが、装者たちとカルマノイズの戦いで発生したフォニックゲインで目覚めちやつたんにやよねー。しかもあの害獣ネフイリムと同じ自律稼働型型完全聖遺物にやんだってー。

イヤー、やんニヤツちやうねーニヤツハツハツ！(ΦωΦ)ワロス

まあ。それから色々あって、響ちやんが姿を眩ましたり、この世界の翼さんが絶唱を唄って戦線離脱して、アチシらの世界に戻ってゴモラモドキの弱点を調べたりと行動したにや。

そんでもって、まずアチシらはゴモラモドキを活動停止にさせようと行動したんにやけど、真っ黒ににやった響ちやんが現れてさあ大変！

そのあとちよつと現場から離れた響ちやんを未来ちやんが一人追いついて行くのを見送ったアチシは残ったメンバーでゴモラモドキを止めようと戦闘を始めたたんにやけど……。

「にやーんか原作より強くなつてない？あのゴモラモドキ？」

アチシの視線の先にはゴモラモドキと戦って苦戦しているクリスちゃん達を見て隣に立つネコカオスに話しかけるとコイツは煙草を吹かした後、ゴモラモドキの姿を少し見ると質問に答えたにや。

「フム……多分だが、この世界に我輩達が存在したことにより、《世界》が奴を強化したんだろう。本来、存在しない筈の異物を除去しようと《世界》がゴモラモドキに干渉したんだろう。現に本来の奴に存在しない回復能力が備わったのがその証拠だな」

「ほーう、という事は例えばアチシらが好き勝手ヤラカシテいたら

「……下手したら《抑止力》案件微レ存？」

「かもしれないな……（フウー……）」

「デジマあ……あーこれはクリスちゃん達に迷惑かけたかにやー。まあ、これに関しては何と置いて、それじゃやりますかあー」

ため息を吐いた後、アチシは久しぶりに全身に魔力を纏うように身を包む。包んだ魔力が霧散するように消えるとそこにはいつもの姿から真祖の姫の姿に変身した私になる。

「んー……っ！久しぶりになったけどやっぱり慣れないわねーこの姿は。……んで？そのネコミミとシツポを生やした半裸の黒コートのおじさまは誰かしら？」

両腕を上に向けて筋肉をほぐした後、視線を隣に立つ混沌の姿になった大男に向けて声をかける。

「というかその姿でネコミミとシツポを生やしたら普通に警察沙汰待ったなしね。」

「ふん……くだらん。そのような事、我にとつては些細な事だ……」

「イヤイヤイヤイヤ……。さすがにネコミミとシツポで出歩いたら、まんま不審者だし……」

想像してみなさい。ネロ・カオスの姿でそんなの生やしたらヤバイでしょ普通。」

「くだらん。それに我からして見たら、そちらの方が無理がある。その姿の実年齢からしたらそちらの方が無理がある」

「あー、そうだよー！見た目ピチピチでも、ネコミミとシツポを生やした真祖の姫の実年齢を考えたら無理があるわよー！アハハハハハハハッ！……ブツ血k i i r わよ変態半裸男」

よーしその喧嘩買ったあ！誰がババアよ！誰が！転生してからまだ■■■■年のピチピチよ！はい、その画面の向こう側から見てるあなた！今コツソリババアじゃんって言ったの聞こえたからね！

「上等よ。オリジナルの代わりにここで決着をつけましょうか？」  
「笑止。やってみるがいい年齢詐称の姫よ」

互いの間に火花を散らし一触即発の中、睨み合っていると聞き覚えのある声が私達の頭上から聞こえて、何だと思えば頭上を見てみると――

「キヤアアアアアッ！」

ゴモラモドキの攻撃に吹き飛ばされたセレナちゃんの姿が視界に入り、それを見た私は地面を蹴って上に跳ぶと、頭上から落下してくるセレナちゃんを上空で受け止めて、軽々と地面に着地して彼女に声をかける。

「よつと。大丈夫？セレナちゃん」

「あ、ありがとうございます。ネコアルクさ……ドナタデスカッ!?」

セレナちゃんが閉じてた眼を開きながら、私の顔を見ると驚いてカタコトになった。え？そんなに驚く事かな？

……………あ。

「そういえば、この姿を見せるのは初めてだっけ？アハハハッ！ゴメンゴメン！私だよセレナちゃん。そりやあビックリするよねえ……教えたいけど、今は響ちゃんを追い掛けて行った未来ちゃんの応援に行かないといけないし……とりあえず詳しい事は後で話すから、それは後でね？」

そう言つて彼女にウインクを送るとそれを見たセレナちゃんが顔を真っ赤にして「は、はひ……」と頷いたので彼女を地面に座せて、隣に立つネロ・カオスモドキに準備はいい？と声をかける。

「然り。なら即座に片付けるぞ。……巨人……か。本来の我なら、もしかしたら貴様を取り込もうとしたのだろうか……悪く思うな。今の我は響の為にこの力を振るう事だけだ」

「あら意外。その姿になつたら自分の事を優先するのかと思つたけど、案外、優しいんだ？まあ、私もこの力を振るう時は響ちゃんと未来ちゃんのために使うって決めているけどね。それじゃあ……」

ゴきりと指の関節を鳴らし、ネコカオスは影から複数の様々な獣を呼び出しながら、私達の姿を見て驚いているクリスちゃん達を追い抜きゴライアスの前に立つ。

「ちよつと本気でやりますか！」

「さあ……生を謳歌しろ！」

その言葉を発端にゴライアスが雄叫びを上げて襲いかかりそれと同時に私達も奴に向けて駆け出した。

——ネコアルク（マジモード）視点、終了——

・  
・  
・

——グレ響視点——

平行世界から来た未来が向こうの世界に帰ってから1ヶ月が経った。

あの騒動の後、私の胸にあった GANG ニールが消え、普通の身体に戻った私は今まで休んでいたリディアン音楽院にもう一度通う事にした。

それと私の周りに変化があった。一つはこの世界の私の友達<sup>未</sup>が以前通っていた学校からリディアン音楽院に転校してきた。それに二課が手引きしたのか寮の部屋に一緒に住めるようになっていた。

長い間離れていたからかまだお互いに少し緊張してるけど、昔と同じように未来と一緒に通えるようになって嬉しいのは内緒だけど。

そしてもう一つは——。

——ネコカオスが私の前から姿を消した事だ。

それに気付いたのは私が未来と再開してから翌日の事だった。特異災害対策機動部二課からの計らいでもう一度リディアンの寮に住めるようになり、私はネコカオスも一緒に連れていこうと隠れ家に向かった。

……でも、部屋にネコカオスの姿がなく、代わりに部屋にあるテーブルの上に手紙だけが置かれてあった。

手紙には私の胸の GANG ニールが消えて、命が助かったと私がもう一度誰かを信じるようになって安心して私から離れるという言葉が

書かれていた。

ネコカオスが何で私と一緒にいた理由は、初めて会った時から心が荒んでいた私の状態とを見抜き、心配して心が折れないように側についていたからだ。

そして、一緒に過ごす内に私の胸にあつたガングニールが私の身体を侵蝕しているのに気付き、ノイズを倒すのを止めない私を見て忠告しても無駄だと判断して、せめて一日でも長生き出来るよう私が無理をしないようにサポートに徹していた。でも、平行世界から来た未来達のおかげで私は助かった。

それを確認したアイツは自分が側にいなくても大丈夫と判断して、姿を眩ました。

私はすぐにネコカオスを探した。初めて会った路地裏、二人で釣りに行った港、心当たりがある場所を探し回ったけど何処を探してもネコカオスの姿を見つけることは出来なかった……。

それから数日経ったある日の放課後、私は未来と一緒に下校しようと荷物を纏めていると、いつも三人一緒にいるクラスメイトの会話が耳に入った。

「うあああ……。ヤバイ、今月色々買すぎたかも……」

「自業自得でしょ。後悔するなら買わなければいいじゃん」

「とんでもない！電光刑事バンの数量限定フィギュアが売っていたんだよ！二度と巡り会うかわからなくなるし、あれを逃したら私は一生後悔する！」

「ふーん、でもそれで次の振り込みまでどう過ごすの？アルバイトでもする？」

「アルバイトかあ……。出来れば日雇いの募集があればいいな」

「募集と言えば、商店街に新しくオープンしたばかりの不思議な喫茶

店がアルバイトを募集してましたよ」

「不思議って、アニメじゃないんだから……。それってどんな店なの？」

「いや、聞くんかい」

「えーと、確か——」

・  
・  
・

「(アルバイト、ね……。ま、私には関係ないな)……。お待ちせ。それじゃ帰ろうか未来」

「うん、帰ろう響」

席を立とうとしたその時、さっきのクラスメイトのある言葉が私の耳に入った。

・  
・  
・

「——確か、二本足で立つ猫みたいな生き物が店長をしてるみたいですよ」

・  
・  
・

「ツ!?!ごめん未来、ちよつと待ってて!」

「え?ちよつと響!」

私は未来に一言声をかけてから、三人で話しているクラスメイトの内の金髪の生徒の肩を掴んで、さっきの話について質問した。

「ねえ！その喫茶店で何処にあるの！」

「わっ!?!立花さん!?!」

「ど、どうしたの？そんな血相を変えて？」

私が声をかけたのが意外だったのか、ツインテールの生徒と短髪の生徒が眼を丸くしていたけど、私は二人の視線を気にしないで金髪の生徒にもう一度質問した。

「いいから、その喫茶店って何処にあるのか教えて！」

「は、はい。商店街にある——」

「あそこか……ありがとう。それと驚かせてごめん！」

「あ、待って響！」

喫茶店までの場所を聞いて、お礼と謝罪を三人のクラスメイトにかけた後、すぐに教室から飛び出すと後ろから慌てて追いかける未来を尻目に目的地である喫茶店まで走り出した。

・  
・  
・

「あー、ビックリしたあ」

「でも意外だったね。立花さんってクールなイメージだったけど、あんな顔も出来るんだ？」

「そうですね。……それなら、今度は私達から話し欠けてみましょうか？」

「お？いいね、それ！」

「意義無し！」

・  
・  
・

「ハア、ハア、ハア、……ここか」

「ハア、ハア、ハア……ここが目的のお店なの？響」



リディアン音楽院からしばらく走り続けた私達は、息を整えながら目的地である小さな喫茶店に辿り着いた。

私は【混沌の灰猫】と書かれた看板が掲げられた喫茶店の扉を開いて中に入ると窓側に五つのテーブル席が設置してあり、目線を反対側のカウンターテーブルに移すとカウンターテーブルに備え付けられた椅子の上に座っているタバコを吸っている猫みたいなナニカの姿を見た私は思わず目を見開いた。

「フウー……まさかお嬢ちゃんみたいな娘がこの店に来るとはな。大したものを出せないがコーヒーの味は自信がある。そちらのお嬢ちゃんも一緒に飲むといい」

アイツはタバコの煙を吐いた後、灰皿に押し付けて火を消すと椅子から飛び下りて、私の後ろで信じられないのを見た顔をしている未来にも声をかけて席に案内してきた。

私は困惑する未来の手を引いて、カウンター席の椅子に座らせてから隣の椅子に座ってからカウンターでコーヒーをドリップしている糸目の黒いネコモドキに声をかける。

「いなくなつたと思つたら、こんな所にいたんだ？」

「フツ……、ようやく肩の荷が降りたのでな。これを期に喫茶店を開いたわけだ。それと我輩の入れるコーヒーは砂糖とミルクを入れなくても飲みやすいぞ」

「ふーん……まあいいけどね。そんなに自信があるなら楽しみだね」

顔を背けてこちらの顔を合わせないアイツの背中を見ながら、私は笑みを浮かべて楽しみにしていると声をかける。

「フツ……そら、出来たぞ。よく味わうといいぞ」

私達の前にコーヒーを置いて飲むよう勧めながら、自分用に入れたコーヒーを飲んでいた。

私がコーヒーが入ったカップを手を取って一口啜ると、繊細な苦味とほんのりとした優しい味わいが口の中に広がった。これならコーヒーがあまり得意でもない私でも飲みやすい味で思わず笑みを浮かべた。

私の顔を見た未来もカップを持って、一口飲むとその味わいに驚い

だが、その優しい味わいに彼女も笑顔を浮かべて、ゆつくりとコーヒーの味を楽しんでいる。

「へー、中々美味しいね。こんなに美味しいならもつと早く飲めばよかったかも」

「フツ、そう言うな……気に入ったなら何時でも来るといい。お得意様として安くしておく」

私の素直な感想が嬉しかったのか、照れ臭そうに言った。

「言ったね？なら、そうさせて貰うよ。改めてよろしくネコカオス」

「ああ、こちらこそよろしく頼むぞ。響」

そうして言葉を交わした私達はニヤリと笑いあいながら、もう一度コーヒーを口に含んだ。

——響視点、終了——